

慈雲尊者と悉曇学

JIUNSONJA TO SHITTANGAKU

自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界

法華陀羅尼略解

平成 22 年度筑波大学附属図書館特別展

目次

ページ

目次

- 1 附属図書館長ご挨拶
- 2 人文社会科学研究科長ご挨拶
- 3 悉曇学と仏教史
- 4 悉曇文字の概要
- 5 慈雲尊者の生涯と事績
- 7 慈雲研究の現状と「梵学津梁」の再構成
- 8 I 慈雲の筆跡 ―書家としての慈雲―
- 9 1) ハ 320-59『法華陀羅尼略解』
- 10 慈雲著『法華陀羅尼略解』翻刻の試み
- 12 2) チ 590-10『梵学津梁略詮阿字部』4 卷 4 冊〔略詮第五之一〕
- 13 3) チ 590-1『五十字門説』『警發地神偈譯互證』〔別詮第四之二十四〕〔末詮之四〕
- 14 II 慈雲の軌跡 ―正法律師・悉曇学者・密教行者としての慈雲―
- 15 4) ハ 240-103『方服図儀』2 卷 2 冊〔雑詮第七補三／四〕〔板本〕
- 5) チ 425-1『悉曇字記問書』
- 6) チ 425-2『悉曇問書』
- 16 7) ハ 320-49『普賢行願讃的示』〔末詮第二之 〕
- 17 8) チ 590-11,12『七九略鈔科・七九略鈔講解』〔通詮第三之二三〕
- 9) チ 590-13,14『七九又略・七九又略講解』〔通詮第三之二四〕
- 18 10) ハ 320-41『大衆金剛薩埵修行成就儀軌』〔大衆軌〕〔飲光補訂〕
- 19 III 慈雲の宇宙 ―「梵学津梁」の写本類―
- 20 11) ハ 320-25『諸讀訳語陀羅尼等雜集』〔本詮第一之一三〇〕
- 12) ハ 320-37『大佛頂陀羅尼；寶樓閣經梵字；梵字千臂甘露軍荼利真言；吉慶讃』〔本詮第一之七～十四〕
- 21 13) ハ 320-53『大佛頂陀羅尼略句義』2 卷 1 冊〔末詮第二之五十一〕
- 14) チ 590-2『恒多羅鈔』2 卷 2 冊〔通詮第三之二十三〕
- 22 15) ハ 320-58『法華陀羅尼諸訳互証』〔末詮第二之八〕
- 23 16) チ 590-16『成就吉祥儀』〔通詮第三之五〕
- 17) チ 590-17『景祐天竺字源梵文新定』〔通詮第三之九〕
- 24 18) チ 590-19,20,21『梵学津梁廣詮天象部』〔廣詮第六之七／八〕，
『梵学津梁略詮三寶部要省』『梵学津梁略詮三寶部要省』〔略詮第五之二／三〕
- 19) チ 590-23『梵文助声歌／山門東寺連声弁』〔前半 雑詮第七之十，後半 雑詮〕
- 25 20) チ 590-18『唐梵雜名千鬘書引』〔別詮第四之一／二〕
- 21) 183.2-J55 法樹『梵文金剛般若經諸訳互証』卷第三百二十〔末詮第二之十二〕
- 26 IV 悉曇学史の金字塔「梵学津梁」 ―梵学史を辿る―
- 27 22) チ 590-5『唐梵文字』〔唐・全真〕〔別詮第四〕
- 23) チ 425-4『梵語雜名』〔唐・礼言集／眞源較〕〔別詮第四之四〕〔板本〕
- 28 24) チ 425-8『悉曇字記』〔唐・智廣〕貴重書〔慶長・元和年間〕〔通詮第三之三〕〔板本〕
- 25) チ 425-40『中天悉曇章』〔空海〕〔通詮第三之一？〕
- 29 26) チ 425-5『悉曇私記林記』〔宗叡〕〔通詮第三之四〕
- 27) チ 425-13『悉曇藏』8 卷 8 冊〔安然〕〔別詮第四之七〕〔板本〕
- 30 28) チ 425-30『悉曇要訣』4 卷 4 冊〔明覚〕貴重書〔天福 2[1234]〕〔別詮第四之十〕
- 29) チ 590-4『梵字形音義』4 卷〔卷 1-2 欠〕2 冊〔明覚〕〔雑詮第七〕
- 31 30) チ 530-658『韻鏡』貴重書〔応永元 [1394]〕〔雑詮第七〕
- 31) チ 530-432『磨光韻鏡』2 卷 2 冊〔文雄〕〔雑詮第七〕〔板本〕
- 32 32) ハ 300-212『多羅葉抄』3 卷 3 冊〔心覚〕〔別詮第四之六〕
- 33) チ 425-24『悉曇字記創学鈔』12 卷 11 冊〔杲宝・賢宝〕〔雑詮第七之一〕
- 34) チ 425-17『悉曇考覈抄』4 卷 4 冊〔有快〕〔雑詮第七〕〔板本〕
- 33 35) チ 425-3『悉曇三密鈔』3 卷 7 冊〔浄嚴〕〔雑詮第七之二〕〔板本〕
- 36) チ 425-55『梵字通同考』2 卷 2 冊〔曇寂〕〔別詮第四〕
- 37) チ 425-33『梵字悉曇章稽古録』2 卷 2 冊〔寂嚴〕〔雑詮第七之十三〕〔板本〕
- 34 参考展示 38) 188.5-J55『慈雲尊者全集』〔1926 年〕首巻～第十七大尾，思文閣出版 1974-77 年。（再版）
- 39) 188.5-H35『長谷宝秀全集』全六巻＋別帙，種智院大学密教資料研究所編，法蔵館 1997 年。
- 35 40) ① 829.88-B64『梵字貴重資料集成』全二巻，梵字貴重資料刊行会編著，東京美術 1980 年。
- ② 811.1-Ma12 馬淵和夫『日本韻学史の研究』（増訂版）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，臨川書店 1984 年。
- ③ 829.88-Ma12 あ）馬淵和夫編『影印注解悉曇学書選集』（全 6 巻），勉誠社 1985-92 年。
- い）馬淵和夫著『悉曇章の研究』，勉誠出版 2006 年。

※パソコン・コーナー『高貴寺蔵書リスト 梵学津梁』DVD 版，前田弘隆監修 2003～4 年，雑補収録版 2010 年。

平成 22 年度筑波大学附属図書館特別展

慈雲尊者と悉曇学

自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界

会期 平成 22 年 10 月 4 日 (月) ～ 10 月 29 日 (金)

会場 筑波大学附属図書館 (中央図書館貴重書展示室)

共催 筑波大学附属図書館

筑波大学大学院人文社会科学研究科

附属図書館長ご挨拶

附属図書館特別展「慈雲尊者と悉曇学」に寄せて

附属図書館では、これまで学内組織の協力を得つつ、本学が所蔵する貴重書、和装本、古地図などを広く公開する展示事業をほぼ毎年行っています。前年の平成21年度には、「日光 描かれたご威光―東照宮のまつりと将軍の社参―」と題して、前身校から継承してきた将軍の東照宮参詣に関する膨大な資料群の一部を展示しました。

今回の特別展は、人文社会科学研究科文芸・言語専攻の秋山学先生のご指導のもと、本学所蔵の和装古書のうち、江戸後期に活動した名僧、慈雲尊者飲光（1718-1804）の自筆本3点を含む関係書目を展示します。慈雲の自筆本3点のうち、『法華陀羅尼略解』（1803年）は、本学の調査で、初めて慈雲の直筆本であることが確認されたものです。なぜ、この貴重な自筆本が本学の図書館に所蔵されるようになったのか、その背景も興味のないところでは。秋山先生の推定によれば、晩年の慈雲がこの『法華陀羅尼略解』を成稿した京の阿弥陀寺が、廃仏毀釈に遭って廃寺となり、書籍が売却された際に東京師範学校が入手したのではないかと推定されています。実際、書目の一つには「東京師範学校」の蔵書印が押され、その時期は、阿弥陀寺が廃寺となった時期と重なっているのです。もし、そうだとすれば、展示和装本の価値とは別に、明治初年の廃仏毀釈運動の意味や、師範学校当時の附属図書館の内実も浮かび上がってこようというものです。

いずれにしても、今回の特別展は、『法華陀羅尼略解』を中心に、古代インドに源流をもつ独特の書法、悉曇学の大家として、また、名僧の誉れが高かった慈雲の足跡とその世界観を辿ってみようというものです。本学に蓄積された豊かな「知」を積極的に内外に向けて発信する、という附属図書館の取り組みの一つとして、多くの方々にご高覧いただければ幸いです。

平成22年10月

附属図書館長 波多野 澄雄

人文社会科学研究科長ご挨拶

附属図書館特別展「慈雲尊者と悉曇学」開催に寄せて

このたび、平成 22 年度筑波大学附属図書館特別展「慈雲尊者と悉曇学—自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界—」が開催のはこびとなりました。本学にとって、また人文社会科学研究科にとっても、たいへん意義深いことであると存じます。

慈雲尊者は、江戸中期の 18 世紀の世界にあって、英独に先駆けて梵学を集大成した人物として、梵学研究の世界トップの水準にあったと言われています。その慈雲尊者の自筆本『法華陀羅尼略解』が、筆写本もないと思われる「孤本」として今回、本学所蔵の和装古書のうちに発見されました。仏教史研究・慈雲研究に新たな光が当たるばかりでなく、梵学研究・手写本研究・伝承史研究など幅広い分野で新たな知見をもたらすものと、おおきな期待がよせられております。

今回の特別展は、その『法華陀羅尼略解』を展示するとともに、同じく慈雲尊者の「梵学津梁」にかかわる多くの関係書目を一気に公開しております。それらの展示書目に触れることでわれわれは、慈雲という一尊者の織り上げる豊かな宇宙の一端を垣間見ることができるばかりでなく、会期中に行われる、今回の特別展開催にご尽力なされた秋山学先生の特別講演「慈雲尊者と悉曇学」によってもわれわれは、慈雲尊者の学問世界の深みを理解する第一歩を踏み出すことができるでしょう。

この特別展は、以上のように、学会の研究活動に大いに寄与し、かつ、慈雲尊者の知の世界を内外に知らしめることに意味のあるものですが、同時に、筑波大学図書館がいかに人文系の豊かな蔵書を誇るかを明かすものでもあります。今回展示の悉曇関係書目の多くには「東京師範学校」の印があり、この一事をもってしても、本学がいかに師範学校時代から東京教育大を経た地道な研究の長い伝統のうえにたっているか、わかります。今回の特別展開催は、本学の長く豊かな伝統をあらためて振り返る機会であると同時に、かくも豊かな蔵書が秘められた附属図書館を身近にもつ人文社会科学研究科にとっては、今後ともその学術的価値を正しく公にすることに努めるという思いをあらたにする機会でもありました。

特別展「慈雲尊者と悉曇学」への、多くの方々のご来駕を、お待ちしております。

平成 22 年 10 月

人文社会科学研究科長 川那部 保明

悉曇学と仏教史

今回展示する筑波大学所蔵和装古書三十数点は、いずれも梵学・悉曇学に関係するものである。まず「悉曇」とは、現代では「デーヴァ・ナーガリー」という文字で記されるインド文字の古い字体（「梵字」）と書法である、と理解して差し支えない。わが国では、この梵字の書法・発音に関わる学問が、広く「悉曇学」と呼びならわされてきた。この梵字ないし悉曇文字によって表されている文献は、基本的に大乘仏教経典と密教儀軌に関わるものであり、そこでの使用言語は、基本的にサンスクリット、つまり「仏教サンスクリット」であると考えてよい。

上述の「デーヴァ・ナーガリー」文字は、北方系ブラーフミー文字に属するグプタ文字（4世紀）の流れを汲み、10世紀ごろからその形態を整えた。それに先立ち、やはりグプタ文字から6世紀に発達したシッダマートリカー文字の書体が「悉曇文字」と呼ばれ、広く流布していた。インドからこの書体を伝えられた中国では、書体・字母が「悉曇」、文法・語釈が「梵語」と区別して呼ばれたが、日本ではその全体が「悉曇」と呼ばれる。

悉曇の字母表は「摩多体文」と呼ばれ、「摩多」は母音字、「体文」は子音字を意味する。悉曇の字母には一定の意義が付与され、これが「字門」と称されて、四十二字門、五十字門などの説が立てられた（展示書目3を参照；以下同様）。デーヴァ・ナーガリー文字は横書きであるが、悉曇文字は縦書きにも横書きにも対応する。字母の綴り方や合成の方法（「切継」）を記した書は「悉曇章」と呼ばれ（25）、これに解説を加えた唐・智廣の『悉曇字記』一卷（24）が弘法大師空海（774-835）により日本に請来されて、それ以降悉曇学の一般的入門書となった。

インドの言語は、最も遡ればヴェーダ語、そしてサンスクリットが文章語として用いられる一方、民衆語（ブラークリット）としてはパーリ語が流布し、釈迦（前463-383）が説いた教えを初期教団から継承した部派仏教・上座部仏教の典籍（「三蔵」すなわち経蔵・律蔵・論蔵）は、まずこのパーリ語で記され、南方に伝えられることになる。これに対し、紀元前後の頃より、それらの教えを「小乗」、すなわち救われる人々を限定する教説であるとし、自らは「大乘」を名乗る新しい精神運動（「大乘仏教」）が興り、北方に向けて勢力を広げた。彼らは、菩薩の意義・在家信徒の役割などを強調して救いの可能性を広く説き、歴史的存在としての釈尊のみならず、同様の悟りを披いた存在としてさまざまな菩薩や如来などの登場する「大乘経典」を編み出す。この大乘経典が記されるにあたっては、文章語としてのサンスクリットが用いられた。それらの経典が中国に伝えられて種々の「漢訳仏典」を産み、朝鮮を経由して日本へと伝えられることになる。『法華経』『華嚴経』『浄土三部経』『般若経』などわれわれに親しい仏教経典は、ほぼすべてこの「大乘経典」に含まれる。

日本に伝来したこれら大乘経典の写本のうち、もっともその年代が遡ると言われているものに、東京国立博物館・法隆寺宝物館蔵『般若心経』（梵本心経）がある。こ

れはターラ樹の葉を用いた貝葉写本であり、紀元後7から8世紀ごろにかけてのものであるとされ、表裏ともに悉曇文字で記されている（裏面は『佛頂尊勝陀羅尼』）。本展示に出品される『悉曇三密鈔』（35）の著者浄厳（1639-1702）は、この法隆寺貝葉の悉曇文字を参考に「浄厳流」の運筆を開発した。これに対し、本展示で中心に取り上げる慈雲尊者欽光は、1772年に宇治厳松院の善淳律師より、世親（320-400）が著した『俱舍論世間品』を載せる梵夾（「高貴寺見葉」）を贈られ、以降「慈雲流」と呼ばれる書風を打ち樹てることになる。

上述した小乗仏教・大乘仏教に次ぎ、仏教最後の段階を示すものとして、7世紀頃より北インドを中心に密教が興る。インドでは1203年、イスラム教徒が北インド地方に侵入し、ヴィクラマシーラ密教学院を徹底的に破壊する。この際に仏教は根絶されたため、密教はチベット・中国そして日本に伝わることになる。

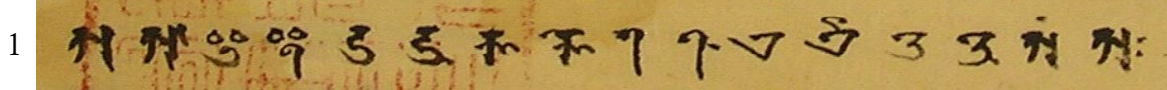
密教は、大乘仏教を基礎とし、仏教以前よりインドに伝わるヴェーダの教えや民間呪術などを加味して形成されたものであり、大日如来を主尊とし、曼荼羅に諸尊を配し、身に印契を結び、口に真言陀羅尼を唱え、心を三昧（観想）の状態に置くことにより即身成仏を目指すことを教義とする。主たる経典は『金剛頂経』と『大日経』であり、各々に基づいて描かれる曼荼羅が「金剛界曼荼羅」および「胎蔵（法）曼荼羅」（これらを「両部（ないし両界）曼荼羅」と称する）である。この教義は、インドから唐代の中国に入って整備された後、空海が入唐（804）して恵果（746-805）より両部の灌頂を受け806年に帰国、高野山の金剛峰寺と京の東寺（教王護国寺）を中心に真言宗を創始してわが国に広められる。空海と同時期に入唐した最澄（767-822）は先に帰国しており、唐での密教摂取が不完全であったとして空海に教えを請うたものの十分には果たせなかった。もっとも彼に続く天台宗の円仁（794-864）、円珍（814-891）が入唐を果たして密教を究めたため、以降の天台宗では密教が盛んとなった。真言宗の密教は東密、天台宗の密教は台密と称される。密教が真言陀羅尼を重視する結果、わが国に伝来した悉曇・梵学は、それ以降主にこの東密と台密によって担われることになる。

慈雲は真言宗の法統に属するが、彼の受けた密教の法脈は、中世の叡尊（1201-90）が再興した南都奈良・西大寺派の系統に連なる。一方、慈雲は戒律復興の運動をも興して「正法律」を唱えた。「正法」とは、釈尊在世中の仏法をもって規範とする精神性であり、慈雲は、まず僧侶が出家する際、授戒（「具足戒」）の式次第として、鑑真（688-763）が大陸より日本に伝えた「三師七証」による正規の方法に立ち返ることを目指した。つまり慈雲は、戒律に関しては唐招提寺、梵学密教に関しては西大寺の法統に連なると考えてよい。

悉曇文字の概要

では次に、悉曇文字の字母・システムについてごく簡単な解説を施すことにしよう。もとより悉曇学では血脈が重んじられ、面授が原則である。この場では、筑波大学所蔵悉曇関係図書に関する限りにおいて、解説に資する知識が得られればよいと考えている。したがって、宗悟尼筆記、本学所蔵『景祐天竺字源梵文新定』（展示書目 17）をサンプルに、それが無理な場合には『中天悉曇章』（25）から補いながら、字母の説明を行うことにする。なお宗悟尼は梵字の達筆として知られた。後載の解説部を参照。

まず、下の写真 1 に掲げるのは「摩多」（母音字）計 16 字母である。



左から順に、それぞれ読みは a, ā, i, ī, u, ū, ṛ, ṝ, ḷ, ḹ, e, ai, o, au, am, aḥ である。このうち、a, ā, i, ī, u, ū および e, ai, o, au, am, aḥ の計 12 字母は「通摩多」、中ほど ṛ, ṝ, ḷ, ḹ の計 4 字母は「別摩多」と呼ばれる。e 音と o 音は長音である。本邦悉曇学の伝統的な教科書となった『悉曇字記』（24）ではこの 16 字母の順序が異なっている。本解説、すなわち『景祐天竺字源梵文新定』での順序は、唐の一行（683-727；真言宗伝持第 6 祖）によるものである。後出の子音字に関してもそうであるが、「ア、イ、ウ…」という字母の順番が、日本語の五十音図の構成に影響を及ぼしたと言われることに注目したい。

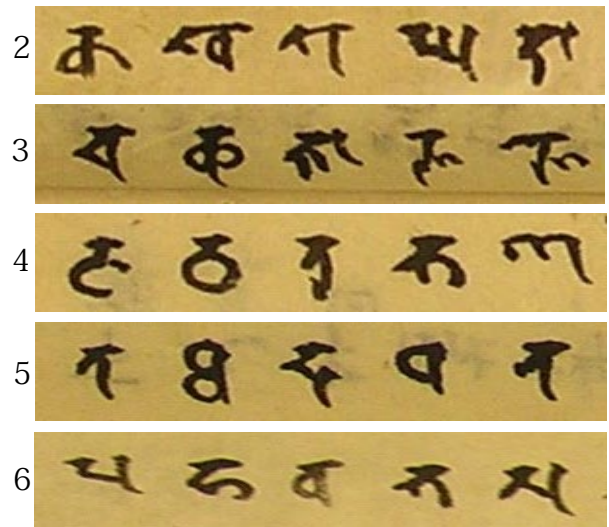
続いて「体文」即ち子音字に移ろう。まず写真 2-6 には 5 文字ずつ計 25 字母が並ぶ。これらは「五類声」と呼ばれる。まず写真 2 に関してであるが、左から順に読みは ka, kha, ga, gha, ṇa であり、これらを「牙音」と呼ぶ。

同様に写真 3 は、左から ca, cha, ja, jha, ṇa であり「歯音」と呼ばれる。ca は「チャ」（悉曇では「シャ」）と発音する。

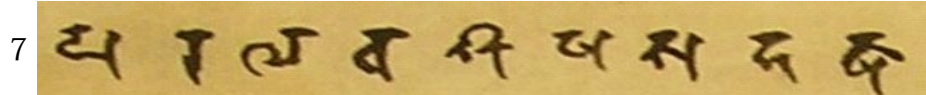
写真 4 は、左から ṭa, ṭha, ḍa, ḍha, ṇa, 「舌音」と呼ばれる。

写真 5 は、左から ta, tha, da, dha, na, 「喉音」と呼ばれる。

写真 6 は、左から pa, pha, ba, bha, ma, 「唇音」と呼ばれる。



次に、写真 7 の計 9 字母は「遍口声」と呼ばれ、上の「五類声」とともに体文を構成する。左から順に、読みは ya, ra, la, va, śa, ṣa, sa, ha, kṣa である。このうち ya, ra, la, va の 4 字母は半母音に当たる。



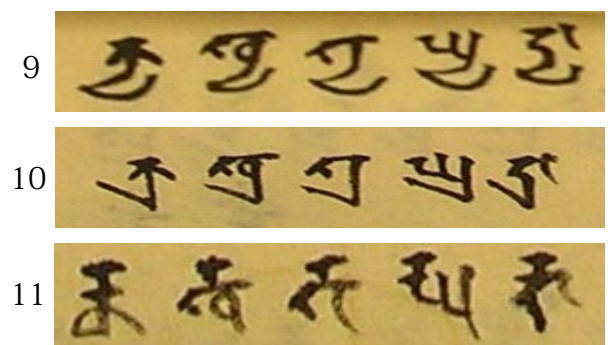
悉曇文字は（デーヴァ・ナーガリー文字もそうであるが）、子音字母に関して、単独で出される場合には、上に例示したように a 音を伴った形で発音し、a 音以外の母音が後に続く場合には、それぞれ定められた母音記号を付す。これを示したのが下の写真 8 である。上の写真 2 の最初にあった ka 字を例に取り、左から順に、ka, kā, ki, kī, ku, kū, ke, kai, ko, kau, kaṃ, kaḥ 字をそれぞれ表す。これらの母音記号は上記「通摩多」の 12 字母が体文に結合するときの省略形に当たり、「十二点」もしくは「十二点画」と呼ばれる。なおこれは『中天悉曇章』（25）からの図である。



さて、悉曇では 1 音節を 1 文字化して表す。つまり二重子音が現れる場合には、省略形を用いながら重字として表記する。その例が写真 7 の右端の字であり、これは kṣa 字であるが、ka 字の省略形と ṣa 字とを上下に重ねた形である。

写真 8, 9, 10 には、それと同様の場合を例示する。まず写真 9 は、写真 2 の各子音の次に ya 音が来る場合であり、左から順に kya, khya, gya, ghya, ṇya 字を表す。また写真 10 は、同じく写真 2 の各子音の次に ra 音が来る場合であり、左から順に kra, khra, gra, ghra, ṇra 字を表す。

一方写真 11 は、写真 2 の各子音の前に r 音が来る場合であり、順に rka, rkha, rga, rgha, rṇa 字を表している。



①



②



慈雲尊者の生涯と事績

1718 (1 歳) 大阪中之島、讃岐高松藩蔵屋敷（大阪市北区玉江町1丁目）川北又助宅に上月安範の子として生まれる（①, ②）。母お幸、幼名満次郎。

1730 (13 歳) 父を失う。住吉郡田辺法楽寺に入り、忍鋼貞紀(1671-1750)に師事（③は法楽寺）。僧名慈雲忍瑞。

1733 (16 歳) 京に上り、儒学者伊藤東涯の許で漢学を修める。

1736 (19 歳) 『四分律』五百結集の文を読んで菩提心を起こし、禅を修す。11 月、野中寺にて秀岩に従い沙弥戒を受ける（④は野中寺）。

1737 (20 歳) 3 月、野中寺にて秀岩に従い秘密灌頂を受ける。

1738 (21 歳) 忍鋼に従って西大寺流の深奥を受け、四律五論および南山律宗の疏鈔（「律三大部」）を研究する。11 月、野中寺にて自誓受による具足戒を授かり、比丘となる。

1739 (22 歳) 年初、忍鋼の後を襲い、法楽寺住職となる。3 月、忍鋼より西大寺流伝法灌頂、両部神道を伝授される。法弟の松林、具足戒を受ける。

1741 (24 歳) 松林に法楽寺を譲り、信州佐久・中込内山正安寺の曹洞宗大梅禅師の下に参禅（⑤は正安寺）。おそらくその後、僧名を慈雲忍瑞より慈雲飲光に改める。

1744 (27 歳) 4 月、忍鋼より長栄寺を託され晋住。この頃より、釈尊在世中の規律に従うことを目指す「正法律」運動を展開（⑥は長栄寺）。

1745 (28 歳) 4 月、寂門に沙弥戒、愚黙に菩薩戒を授ける。10 月長栄寺を結界、僧坊とし、沙弥の即成をあわせて 4 人の僧侶が揃う。

1746 (29 歳) 7 月 愚黙に具足戒を授ける。

1748 (31 歳) 『受戒法則』2 巻を著す。

1749 (32 歳) 愚黙の進言により『根本僧制』5 条を制定する。

1750 (33 歳) 有馬桂林寺（現・正福寺）を兼任（⑦は桂林寺）。4 月、道宣（596-667）の著書『四部律行事鈔』を講ず。12 月、忍鋼貞紀遷化。

1751 (34 歳) 有馬桂林寺にて『方服図儀』を著わす。愚黙、即成あいついで示寂。

1753 (36 歳) 『枝末規繩』を著わす。

1754 (37 歳) 『四分律』を講ず。

1756 (39 歳) 春、法隆寺で聖徳太子の袈裟を検証。

1758 (41 歳) 高野山の真源より『普賢行願讃』の梵本を贈られる。5 月～7 月の間『南海寄帰内法伝解纜鈔』7 巻を河内額田不動寺にて完成（⑧は旧不動寺：現・浄土宗重願寺の多宝塔）；生駒山中腹に雙龍庵を結ぶ（⑨は長栄寺境内に移築された雙龍庵禅那台）。

③



④



⑤



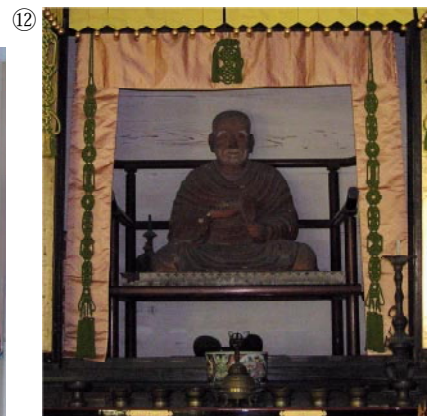
⑥



⑦



- 1761 (44 歳) 雙龍庵時代法語 1 ～ 9.
 1762 (45 歳) 雙龍庵時代法語 10 ～ 39. 『方服図儀講解』を著わす.
 1764 (47 歳) 『根本僧制』 および 『枝末規繩』 を増補補訂する.
 1766 (49 歳) 1 月, 『方服図儀』 に基づく千衣裁制第一衣成る.
 1767 (50 歳) 『普賢行願讃梵本聞書』 10 巻を著わす.
 1768 (51 歳) 『七九略抄』 5 巻, 『七九又略』 1 巻を著わす.
 1770 (53 歳) この頃, 全千巻より成る 『梵学津梁』 の全容をほぼ完成させていたと伝えられる.
 1771 (54 歳) 雙龍庵時代を終え, 京の阿弥陀寺に移る (cf. ⑪は阿弥陀寺廃寺跡).
 1772 (55 歳) 宇治嚴松院の善淳律師より, 貝葉梵本を贈られる.
 1773 (56 歳) 『十善法語』 の法話を行う.
 1775 (58 歳) 『十善法語』 完成.
 1776 (59 歳) 河内葛城山高貴寺に入り, 同寺を正法律の総本山と定める (⑩は高貴寺奥の院).
 1781 (64 歳) 『人となる道』 (初編) を著わす.
 1783 (66 歳) 『表無表章随文釈』 5 巻成る.
 1786 (69 歳) 高貴寺僧坊, 正法律一派総本山として幕府より認可さる. 秋, 『高貴寺規定』 13 条成る.
 1788 (71 歳) 夏, 『日本書紀』 神代巻を閲読し, 神道を明らかにするために 『無題抄』 を著わし, 神道研究へと進む.
 1792 (75 歳) 12 月 『人となる道 神道』 (第 3 篇) を著わす. この頃, 雲伝神道の主著 『神儒偶談』 完成.
 1795 (78 歳) 『両部曼荼羅随聞記』 (上下, 弟子筆受), 『曼荼羅伝授目録』 (同) を著わす.
 1796 (79 歳) 8 / 9 月, 弟子たちのために 『神道灌頂教授式』 (弟子筆受) を実施.
 1797 (80 歳) 4 月 『人となる道 略語』 (弟子筆受) 成る.
 1798 (81 歳) 1 月 『神代要頌』 成る.
 1799 (82 歳) 10 月 『神道三麻耶式』 成る.
 1800 (83 歳) 春 『比登農古乃世』, 5 月 『金剛般若經講解』 成る.
 1802 (85 歳) 『金剛薩埵修行成就儀軌』 成る.
 1803 (86 歳) 2 月 『理趣經講義』 3 巻を著す.
 - 3 月 『法華陀羅尼略解』 を著す -
 1804 (87 歳) 夏, 長栄寺にて発病, 秋, 養生のため京阿弥陀寺に移り, 小康を得て 『金剛般若經』 を講ず.
 1804 年 12 月 22 日 阿弥陀寺にて遷化 (⑪), 高貴寺奥の院の廟に眠る (⑫⑬; ⑫は高貴寺開山堂の慈雲像).



慈雲研究の現状と「梵学津梁」の再構成

江戸時代中・後期、河内国高貴寺を中心に活動した慈雲尊者飲光（1718-1804）は、正法律による戒律復興、雲伝神道の創設、純朴精粹なその書風をもって知られるとともに、わが国における梵字悉曇学のアーカイヴとも言える「梵学津梁」全一千巻の編纂により、学徳兼備の名僧と謳われた。関西地方では、彼の教えである「十善戒」とともに、いまなお広く親しまれる存在である。

今回、筑波大学附属図書館の蔵書中に、この慈雲尊者による未確認著作の自筆本が1点、それ以外に自筆本が2点、計3点が発見された。これらの写本には、本学の前身である東京師範学校（明治6年～19年）の蔵書印が捺印されている。筑波大学は、前身校である東京教育大学・東京文科大学、また師範学校から東京高等師範学校にかけての所蔵書を受け継ぐが、今回の発見はわれわれに、東京師範学校当時の図書館蔵書の内実や、近代日本における教育制度と内容のあり方、明治初年度に激烈を極めた廃仏毀釈の動きなどに関して、改めて深く思いを致す必要を迫るように思われる。

慈雲尊者に関しては、2004年がちょうどその没後200年に当たり、当時全国規模で記念の催しが広く行われた。まず「慈雲尊者二百回遠忌の会」が結成され（事務局は大阪の法楽寺）、大阪市立美術館と静岡三島佐野美術館において「心の書 慈雲尊者」と題した展覧会が2004年に開催された。また同年末には、東京国立博物館において「特集陳列 高貴寺所蔵 慈雲の書」も催されている。

これらの企画から理解されるように、慈雲尊者といえ、今までその書芸術にスポットライトが当てられる場合が多かった。もっとも2009年には、第14回国際サンスクリット学会大会開催に伴い、京都大学において、高貴寺所蔵写本をもとに企画展「慈雲 原点を求める心」が開催されている。これは慈雲が、江戸時代という日本の鎖国期にありながら、英独における古代インド学の勃興に先駆け、すでに世界的な水準で梵学・仏教学を集大成させていたという事実に照らし、彼の偉大さを再評価しようとする試みであると言ってよからう（cf. 渡辺照宏『日本の仏教』岩波新書1958年、27頁など）。もちろん、江戸期までに日本に伝わっていた梵語文法の知識は非常に限られていたため、明治期以降欧語によるサンスクリット学が導入されると、それまでの悉曇学は塗り替えられてしまい、寺院における継承のみに限定されるようになる。ただ近年では、ちょうど欧米の文化・教育におけるラテン語やギリシア語の役割を、日本文化史における梵学・悉曇学のうちに見出し、悉曇史を総括した慈雲を、いわば「日本におけるヒューマンリストの祖」として意義づけようとする動きも見られる。

このように、慈雲を人文主義的な観点から再評価する際にも、その中心的意義は彼の「梵学津梁」編纂事業に置かれる。この「梵学津梁」は、「全一千巻」として夙に知られていたものの、開版される機会を持たなかったため、「幻の大著」としてその全貌は長く闇に包まれていた。おそらく「一千巻」という数字はやや誇張に過ぎ、象徴

的な意味しか持たないであろうことから、研究者によっては、この「梵学津梁」を「ペーパー・プランに過ぎなかったもの」とする見解を出すほどである。

しかしながら、今回展示する本学所蔵書の多くが、巻頭に「梵学津梁 × 詮〇〇」のような形式で題目を掲げていることを見れば、「梵学津梁」は、単なる机上の「ペーパー・プラン」として退けられるべきものではなく、慈雲自身の企画立案のもと、多数の弟子や尼僧を擁し教育を施しながら、いわば「慈雲シユレ」の「行」として進められた一大事業であったと考えるべきであろう。

さいわい、200回遠忌を期に、種智院大学学長の頼富本宏師を主幹とし、現高貴寺住職前田弘隆和上の監修によって高貴寺所蔵分「梵学津梁」のデジタル化が進められ、大阪大谷大学や大阪芸術大学の協力のもと、2008年11月、そのDVD版である「高貴寺蔵書リスト 梵学津梁」（2010年6月増補）が完成した。本目録では以降、このDVDを「高貴寺DVD」と呼ぶことにする。この高貴寺DVDは、前田和上のご厚意により本学蔵書とされ、今回もパソコン・コーナーでの閲覧が可能となった。

これまで謎に包まれていた「梵学津梁」であるが、その概要は『大正新脩大蔵経』第84巻所収の「梵学津梁総目録」（No.2711）、あるいは『慈雲尊者全集』（参考展示38）巻9下所収の「梵学津梁総目」などにより、既にほぼ推測されてはいた。ただ『慈雲全集』編纂の際に、編者の長谷宝秀師（参考展示39参照）が「梵学津梁」だけは収録することを断念し、「津梁」の写本の大部分は高貴寺に保存されている、と伝えられてきただけに、今回「高貴寺DVD」が公刊されたことの意義は大きい。

もっとも、この「高貴寺DVD」を見てすぐに気づくことがいくつかある。1) 副本の類が総数勘定に含められている。2) 上掲の「梵学津梁総目（録）」など、旧来の「目録」類に当然のごとく挙がっていた諸書が脱落している（『韻鏡』、『南海寄帰内法伝解纒鈔』、『方服図儀』など）。3) 旧来の目録では「梵学津梁」に入るかどうかわからないものが、今回の高貴寺DVDでは「梵学津梁」のうちに含まれている。4) 分類が旧来のものと異なる著作がいくつか見られる。たとえば『悉曇藏』は別詮ではなく、雑詮に入っている、などである。

「高貴寺DVD」に収録された写本点数は、副本を含めてほぼ500点弱、「全一千巻」とされる場合の約半数である。上述したように、公開されたその姿は、われわれが予期していたものよりかなり小規模であり、脱落している書目も多い。

おそらく今回の筑波大学所蔵諸写本をはじめ、全国各地の寺院・大学には、「梵学津梁」を構成する写本が点在し、眠っているのではないだろうか。今回の展示会が、「梵学津梁」の全国規模での再構成事業に向けて、そのきっかけをなすようなことになれば、と秘かに願う次第である。

I 慈雲の筆跡 ―書家としての慈雲―



(慈雲による揮毫の数々)

【総説】この第I部には、筑波大学附属図書館所蔵和装古書のうち、慈雲の自筆と判明した3点を展示する。

慈雲尊者は書家としても知られたことから、関西諸地域には慈雲の揮毫が多く遺されている。左上から順に、高貴寺山門前「大界外相」、高貴寺奥の院「ボウヂマンダラ」（菩提道場）、高貴寺の山号「神下山」（こうげさん；奥の院前）、高貴寺西域に隣接する磐船神社「樛宮」（とがのみや）、同「哮峰」（いかるがのみね）である。慈雲は習合神道の一派、雲伝神道の創唱者であり、その道場としてこの磐船神社に拠っていた（詳しくは神道大系・論説編14「雲傳神道」、神道大系編纂会、1990年を参照）。

今回の本学所蔵・自筆本発見も、これらの揮毫から得られた慈雲の筆致が根拠の一つとなったが、慈雲のこのような特徴的な運筆は、本図録3頁に記したような「高貴寺貝葉」（参考展示40①『梵字貴重資料集成』収録）との出会いに起因するとされる。

さて、自筆本3点のうち最初に挙がるのが、今回発見された慈雲の未確認著作自筆本『法華陀羅尼略解』であり（書目1）、上に掲げた慈雲の特徴的な筆致が顕著である。また慈雲はほとんど必ず、梵字によるサインを記す習慣をもち、「マイタラメイギャ」（慈雲）あるいは「カーシュヤパ」（飲光）のいずれかをを用いるが（仏教関係には後者、神道その他には前者を用いる傾向がある）、書目1には後者が用いられている。さらに巻末には「享和癸亥三月四日小子記」とあるが、これは享和3（1803）年、慈雲の没年の一年前に当たり、末尾には臘六十四／行年八十六と記されている。間違いなく慈雲の真筆である。

この『法華陀羅尼略解』は、『妙法蓮華經』では巻第八陀羅尼品第二六に収められる五つの陀羅尼、すなわち①藥王菩薩 ②勇施菩薩 ③毘沙門天王 ④持国天 ⑤十羅刹女による呪、および普賢菩薩勸発品第二八に収められる普賢菩薩による呪を釈したものである。梵字テキストは弘法大師請来本（『梵字妙法蓮華經儀軌』）に基づき、竺法護（239-316）による268年完成の『正法華經』に見られる漢訳が逐語的に付されている。

前頁に触れた「梵学津梁」所収の著書として、慈雲には他に『法華陀羅尼諸訳互証』が存する（展示書目15）。もっとも、この『諸訳互証』が『正法華經』を含めた既存訳数種を比較対照していたのに対し、『法華陀羅尼略解』は『正法華經』の語釈のみを対置したうえで、慈雲による句釈を付したもので、比較的簡素な体裁を採る。「梵学津梁」は、慈雲の示寂後も弟子たちの手によって追補が行われた。慈雲晩年のこの著作も、「梵学津梁」のなかに収録されて不思議ではないと言えようが、高貴寺DVDには『法華陀羅尼略解』と一致するものは見出されない。したがって『法華陀羅尼略解』は、その筆写本も持たないいわゆる「孤本」であり、現在のところ筑波大学所蔵の慈雲直筆本しか存在しないものと思われる。本図録には、慈雲が読んだ梵文テキストと竺法護の句義、それに慈雲による句釈を起こして収録した。

本第I部に収めた他の慈雲自筆本2点は、『梵学津梁

略詮阿字部』（書目2）および『五十字門説』（書目3）であり、これらはいずれも「梵学津梁」のうちに収められる。「梵学津梁」に関して、『慈雲尊者全集』等による従来の概容と、新たに公刊された「高貴寺DVD」による実体とがやや異なることに関しては前頁に触れたが、その全編は7部門に分かたれる。従来はこれが本詮250巻、末詮100巻、通詮100巻、別詮85巻、略詮33巻、廣詮350巻、雑詮82巻に区分され、計一千巻を成すとされてきた。各詮の内容は、

本詮 古来伝わっている貝葉などの梵文資料

末詮 経典、陀羅尼の梵文を研究解釈したもの

通詮 『悉曇字記』『悉曇林記』など先学の著作

別詮 通詮以外の基本的な悉曇書や字典

略詮 慈雲が新たに編纂した梵語字典

廣詮 略詮を拡大して収録したもの

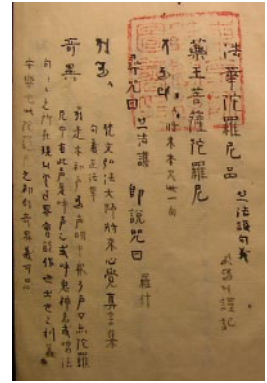
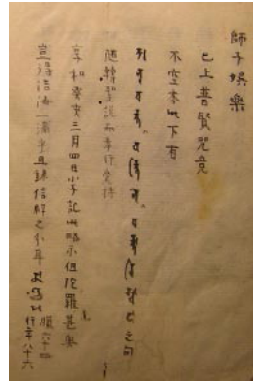
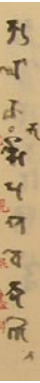
雑詮 『三密鈔』『韻鏡』などの重要典籍と諸国文字

である。書目2はこのうち略詮に、書目3『五十字門説』は別詮に分類される。また書目1は、その性格から末詮に収められうるものである。

このような『法華陀羅尼略解』が筑波大学の所蔵書に入った背景には、おそらく慈雲が晩年、京の阿弥陀寺に晋住してこの『法華陀羅尼略解』を成稿し、その後阿弥陀寺が廃仏毀釈の折に廃寺となって書籍が売却された、という事情を想定することができそうである。慈雲は晩年、自らは経典儀軌について口述講義し、弟子が筆受する、というスタイルをとることが多かった。このスタイルであれば、ある著述に関して、著者以外にその存在を証言する他者が必ず実在することになる。今回『法華陀羅尼略解』について、その写本はおろか、その存在に言及した文献すら皆無であるところを見れば、おそらく慈雲は阿弥陀寺において、専ら自らの観想のためにこの小著述をしたためたものと想定されよう。

京の阿弥陀寺に関しては、明和8（1771）年より安永5（1776）年まで慈雲が住持、のち慈雲が高貴寺に移ったため阿弥陀寺には輪番を置くことになった旨の記録が遺されている。輪番には正法律一派中上座分の者が当たるとされ、護明、法護、諦濡、一雲などの名が残るが、一雲は1802年秋に輪番を辞しており、それ以降三十余年住持は不明、1839年ごろより暁岳幻堂、それを千淳一如が継ぎ、明治7、8年ごろに阿弥陀寺が廃寺となった旨記録がある。これによれば、慈雲の晩年から示寂後にかけて、阿弥陀寺に住持した僧は定かではない。これは、晩年に慈雲がほとんど阿弥陀寺に起居していたという伝承と符合し、また『法華陀羅尼略解』を見聞した僧が、慈雲本人以外には皆無であったという状況をも推定することができるだろう。さらに、書目1に「東京師範学校」の印が押された時期は、ちょうど阿弥陀寺廃寺の頃と合致することになり、期せずしてこの孤本が本学所蔵のものとなった経緯を跡づけることが可能である。

1) ハ 320-59 『法華陀羅尼略解』



4

3

2

1

【解説】全 17 丁である。初頁には「飲光謹記」、巻末にも「飲光」と、カーシュヤパの梵字表記によって記名がなされている（1，2）。また巻末には「享和癸亥三月四日、小子此の略示を記す。但し陀羅尼甚奥なり。あに浩海の一滴を得んや。まさに信解をこれ録さんとするのみ。飲光。得度後 64 年、行年 86 歳」との意が記されており、經典を前に、年老いてなお謙虚にして余りある慈雲の姿を目の当たりにすることができる。

従来、享和 3 年 2 月 24 日に校了を見た『理趣経講義』が慈雲最晩年の主著とされてきた。参考までに、高貴寺 DVD より『理趣経講義』（三）の末頁（0155-imag0032 左頁）を併載する（3）。

以下、この『法華陀羅尼略解』をめぐる想定される事柄を書きとめておく。

1. 鳩摩羅什らによる訳文（『妙法蓮華経』）では、陀羅尼に関して音写が行われているに過ぎない。既存の漢訳仏典の訳語に関しては、『妙法蓮華経』を含め、すでに『法華陀羅尼諸訳互証』において逐一比較検討が施されているものの、そこでは慈雲による陀羅尼の釈義が行われることはなかった（展示書目 15『法華陀羅尼諸訳互証』を参照）。慈雲がこの『略解』で参照しているのが、語釈を付したと言える『正法華』のみであることは、慈雲の目指したものが、陀羅尼の内容的な解釈であり、観想の実りの記録であることから理解可能であろう（上掲、慈雲による巻末の付記を参照）。

2. 慈雲は、薬王菩薩咒の末尾に「末世における法華の八正道の功力護持か」と自らの理解を提示している。八正道とは、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を指す。この『略解』の中で具体的に指示がなされているのは、正念、正思惟、正精進、正定、正戒、正命、正見、正語であり、戒目として完全に一致しているというわけではないが、全体的に見て慈雲のこの解釈は至極穏当かつ的確なものと言える。正法律運動のなかで、「十善戒」（不殺生、不偷盗、不邪淫；不妄語、不綺語、不悪口、不両舌；不慳貪、不瞋恚、不邪見）を説いた慈雲ならではの解釈と考えられよう。

3. 上述した享和 3 年 2 月 24 日校了のものは、正確に言えば『大日経第三悉地出現品梵語』そして『教王经初品梵語』であり、晩年の慈雲が、このころ胎藏・金剛両部の経書・儀軌に関して集中的に還梵と梵文釈を行っていたことが推察される。今回新たに発見された『法華陀羅尼略解』は、そのおよそ十日後に完成したことになる。真言律系の慈雲にあって、天台法華系經典への傾きは意外とも受け取れるが、ここに含まれる六個の陀羅尼は、不空（705-774）訳による『観智儀軌』（『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』）のうちに配され、胎藏部法と金剛界法を併せ含んだ儀軌を構成する。したがって慈雲は、この『法華陀羅尼』を、両部の観法儀軌の根幹を成す陀羅尼として取り上げたものとまず考えられよう。遡って享和 2（1802）年、慈雲は『金剛薩埵修行成就儀軌』を補訂し（展示書目 10）、『金剛頂経』系の観法伝授に努めている。『理趣経』にしても、真言宗の常用經典

であると同時に、金剛薩埵を主尊とする五秘密瑜伽の秘法である。また金剛薩埵は普賢菩薩と等置されるが、『普賢行願讃』（展示書目 7 参照）は慈雲に梵学専修のきっかけをもたらすとともに、「懺悔文」などをも併せ含むところから、戒律の墨守を絶えず想起させ、慈雲が生涯にわたって重んじた梵典であった。

4. これまで最晩年の著作とされてきた『理趣経講義』に関しては、漢訳から梵文を推定する「還梵」の意義が称揚されるのが常であったが、本著作は漢梵部分を含まない。したがって慈雲は、単なる語学的な自らの秀逸性を顕示しようとしていたのではなく、晩年にいたるまで、梵文原典に基づいた諸儀軌の遂行と、梵典をめぐる絶えざる観想を意図していたということが明らかとなる。

5. なお 5 頁の一箇所にのみ、梵文の左側に、慈雲以外の筆記者による筆跡で、朱字にて bhaṣai 光 paśa 見 ve 俱 kṣa 盡 ni 期と語釈が付してある（写真 4 参照；次頁注 2）。これは bha 字が慈雲自身のテキストには脱落していたためで、この筆記者がその bha 字を補っている。この注記者は、慈雲以外にこの著作を目にし手に取った（ごくわずかな）人物であると推定されるが、筆跡その他から、高貴寺僧坊寺務第 9 世を務め、後に『慈雲尊者全集』の編纂を企図した伎人戒心師（1839-1920）かと想定される（参考展示 38，39 を参照）。

6. 『法華経』に含まれるこれら六つの陀羅尼は、『法華経』六番神咒として広く知られるものであり、梵文に関して文法的に正確なアルファベット化はすでに世に流通している（坂内龍雄『真言陀羅尼』、平河出版社 1981 年、154-166 頁；他に有賀要延編著『平成新編ダラニ大辞典』、国書刊行会 1992 年など）。したがって本図録では、むしろ慈雲が受け取った悉曇文を忠実に再現するよう努めることにした（次頁・次々頁参照）。悉曇関係文書について言うことであるが、一般に伝承上の誤り・間違いは多いと言ってよい。ただ『正法華』の句義のみを頼りに、しかし梵文を基軸に据えて釈義を行おうとした慈雲の精神性に触れる上で、本図録のあり方は不可欠なプロセスでもあり、また梵文だけを「正しい」かたちにしたのは、慈雲の釈と文脈が合わなくなる箇所が出るためでもある。

7. このことは一般に、われわれが悉曇文書をいかに扱いつつどのように位置づけるべきかという問題に関わる。梵語文法の知識は、いまや欧米の諸書により正確に与えられる。ただ特に宗教文書等の場合、原典の「正確な」理解というものは、知的解釈以遠の次元への「披き」を閉ざす危険性をつねに孕んでいる。悉曇の場合、その「意味」は、漢訳仏典においてすでに与えられている場合がほとんどである。したがってわれわれが悉曇文書に求めるべきものは、慈雲が立ったのと同じ境位、すなわち意味を把握した上で、可能な限り原典に依拠し原典に忠実であろうとする姿勢であろうと思われる。

慈雲著『法華陀羅尼略解』 翻刻の試み

(第 1 丁～第 17 丁 = 1 頁～ 34 頁)

法華陀羅尼品 竺法護句義 Kāśyapa 謹記

①藥王菩薩陀羅尼 (1 頁～ 16 頁)

tad-yathā 將來本欠此一句

尋咒曰 竺法護 即說咒曰 羅什

anye 梵文弘法大師將來心覺真言集 句義正法華

奇異

a 是本初聲 nya 声明中衆多聲 e 点陀羅尼中有此聲是呼聲歟或呼鬼神名或唱法句

... 之所在現 maṇḍala 界能作世出世之利益安樂也此陀羅尼之初句奇異義可思

manye 承上 anye 而云..

所思

mana 意也 ya 是有所作之辭

manye

意念 大凡陀羅尼重疊之語下重於上或別有所命也

mamanye

無意

上之 ma 通于 a 無義

四句並以 nya 字而唱出

cire

永久 cire 日貝貝 (※注 1) 亦 cireṇa bhavanta 永久之字体中有行義可知

carite

所行奉修 cara 行也 ite 之助聲成奉修事深趣

二句以 cara 行聲而唱出 e 聲劣流便大凡密咒之劣儀不當字義句義含藏彰德難量音之流便應四種相應而成其事業也

故一阿点一曳聲所容易也

上文所思意念等正念正思惟之行永久不退是正精進義耳

śame

寂然

奢 唐 (梵文字) 他止也

śamitā vi-

tava 之字体勝上義如美義 i,e 音之本末相通

澹泊

śānte

志默

右三句 śa 字本性寂義為要正定之義

mukte

解脫

muktame

濟度 me 自說上士之言成濟度

二句 mukta 唱出是正戒義

sama

平等

aviśame

無邪

a 無 viṣa 毒三毒之毒

saumi

安和

sami

普平

四句除第二句並 sama 唱出蓋正命之趣 但第二句 śame 之言亦音近

sama

kṣaye

減盡

akṣaye

無盡

akṣiṇe

莫勝

三句 kṣa 字唱出是正見之趣

śānte

玄默

śami

澹然 上寂然澹泊此玄默澹然其義不遠蓋此中正見中之玄默乎

dhāraṇi

總持

āloka-bhasai paśavekṣaṇi ※ 注記參照

觀察

義訳乎 āloka 所暗 bhaṣai 光 paśa 見 ve 俱歟皆也 kṣaṇi 盡期明与無明悉皈于玄默故云觀察 (※ 注 2)

此三句並 vekṣaṇi 与上三句是一條

nevite

光曜

abhyantala-neviṣṭe

有所依倚恃怙於內

atenta-pāriśuddhai

究竟清淨 句義欠 atenta

utkule

無有坑坎

mutkule

六無高下

arale

無有回旋

parale

所周旋処

śukāṅkṣi

其目清淨

akṣi 目歟 śukā 清淨

正見之義

āsamasame

等無所等

buddha-vikriḍite

覺已越度

已字梵文不見義如乎

dharma-parīkṣite

而察於法

而字梵文不見

saṃgha-nirghoṣāṇi

令衆無音

正語伏他之功

bhāṣabhāṣaśoddai

所說鮮明

mantra mantrākṣayate

而懷止足

uruta

盡除節限

ruta 音

uruta-kausalya

宣暢音響

akṣayatāya

而了文字

avaro

無有窮盡

amadyanatāya

永無勢力無所思念

已上藥王菩薩咒八正道之功力護持法

華於末世歟

②勇施菩薩陀羅尼 (17 頁～ 20 頁)

tad-yathā

jvale

晃曜 智慧

mahā-jvale

大明

炎光

mukke

演暉

光照十方

ane

順來

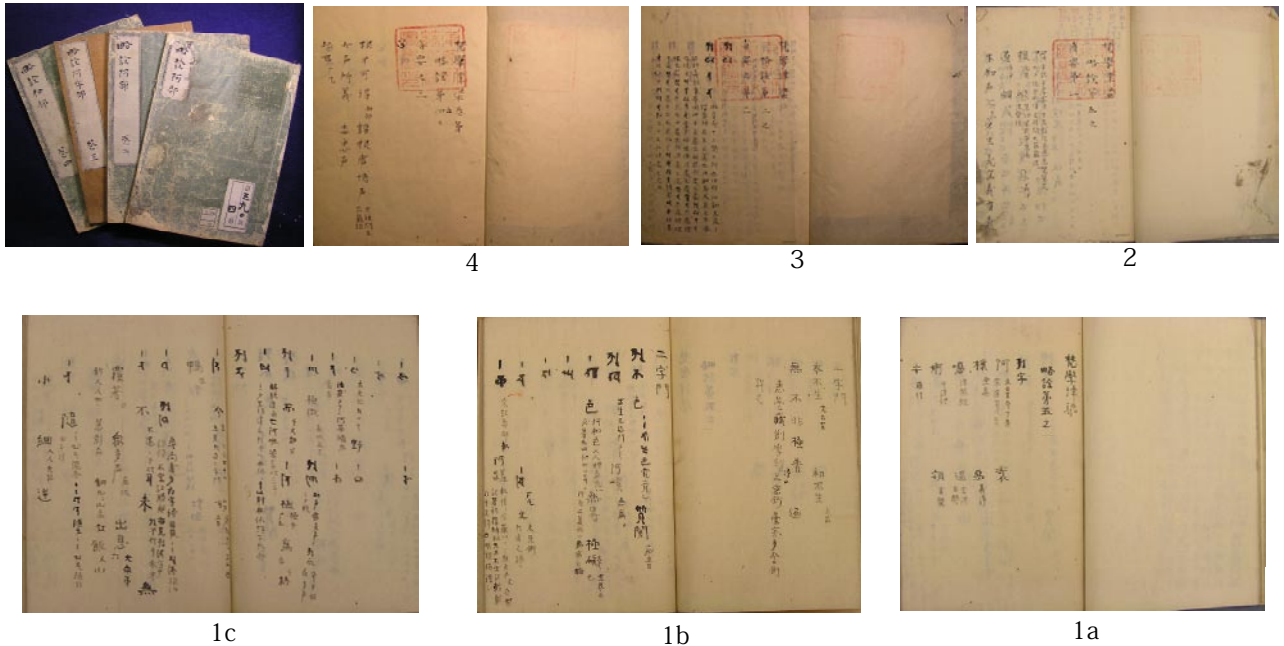
內外上下

alavate
 当章
 到处除闇
 nṛte
 悦喜
 nṛtivati vati 具歟
 欣然
 itṭini
 住此
 viṭṭini
 立制
 ciṭṭini
 永住
 nṛṭṭini
 無合
 nṛṭṭivate
 無集
 勇施菩薩陀羅尼初五句光暉演暢後六句法喜永伝
 六句中初二句 nṛ 字唱出後四句 ṭṭi 字介布
 ③毘沙門天王咒 (21 頁～ 23 頁)
 ali
 富有
 nali
 調戲
 notali
 無戲
 anālo
 無量
 nāmi
 無不富
 kunāmi ku 字疑之辭何義
 何不富
 富有法尔於世起調戲 此調戲本来無
 戲此無戲受用無量一切時处無不富何
 不富 右多聞天之護法
 ④持国天咒 (23 頁～ 26 頁)
 gaṇe
 無數
 gaṇe
 有数
 gauri
 正法華欠句義 白 又 嚴惡
 白身
 胎軌但 gauri gori 二本
 gandhāri
 的翻歟但外道亦有 gandhāri 咒
 持香
 caṇḍāli
 曜黑
 又暴惡義
 mātoṅgi
 残祝
 外道咒
 saṃśuli
 大体
 毒虫主有常求利咒
 vrūsaṇi
 千器順述
 将来本欠此二字
 ati
 暴言至有
 右持国天咒
 ⑤十羅刹女咒 (26 頁～ 27 頁)
 itime itime itime itime itime
 於是 於斯 於尔 於氏 極甚
 指示声五偏至第五偏義成沈重

nemi nemi nemi nemi nemi
 無我 無吾 無身 無所 俱同
 rūhe rūhe rūhe rūhe rūhe
 已興 已生 已成 而住 而立
 stahe stahe stahe stahe stahe svāhā
 亦住 嗟歎 亦非 消頭 大疾無得加害
 右十羅刹
 ⑥普賢菩薩陀羅尼 (28 頁～ 34 頁)
 adaṇḍai
 無我
 人法二空
 daṇḍapatai
 除我
 断習氣
 daṇḍavarte
 回向方便
 普皆回向
 daṇḍakuśale
 寶仁和除
 恒順衆生
 daṇḍasudhāre
 甚柔軟
 sudhāre
 甚柔弱
 sudhāra-pate
 句見
 buddha-paśyanye
 諸佛回
 見諸佛
 sarva-dhāraṇi āvartane
 諸總持
 欠転義
 sarva-bhāṣyāvartane
 行衆說
 諸転法輪
 suāvartane
 蓋回転
 saṅghaparikṣiṇe
 盡集会
 随喜功德
 saṅgha-nirghoṣani
 除衆趣
 asaṅghi
 無央数
 saṅghapagatai
 計諸句
 treadhva-saṅghatulya-arate-parate
 三世数
 句義契誤相応
 sarvasaṅgha-samātikrantai
 越有為
 sarvadharmasuparikṣite
 学諸法
 sarvasatva-ruta-kāuśalyānugatai
 曉衆生音
 siṅha-vikritrite
 師子娛樂
 已上普賢咒竟
 不空本此下有
 anuvartta varttine varttāri svāhā 之句
 隨転聖說而奉行受持
 享和癸亥三月四日小子記此略示 但陀羅 (尼) 甚奧
 豈得浩海一滴乎 且録信解之介耳 Kāśyapa 臘六十四 行年
 八十六

※注 1) = 『普賢讚』(『普賢行願讚』) の略示。同第 50 頌末参照。
 注 2) 本写本にはこの箇所のみ朱筆の書き入れがある。解説参照。

2) チ 590-10 『梵学津梁略詮阿字部』 4 卷 4 冊〔略詮第五之一〕



【解説】略詮第五之一，すなわち「略詮」部の冒頭に相当する部分である。

全4冊で1帙を成し、それぞれ36丁、45丁、41丁、21丁より成る。一帙ものとして、全体が「梵学津梁略詮阿部伊部」の書名で登録されている。写真のように、順に「略詮阿部」「略詮阿部卷二」「略詮阿字部卷三」「略詮伊部卷四」と題されており、このうち第3冊目「略詮阿字部 卷三」が慈雲の直筆である（上写真1a, 1b, 1c）。

写真2, 3, 4はそれぞれ他の3冊の写真である。2, 3には「省要」の名があることから、同じく「省要」の名を冠した展示書目18（後半）との比較が興味深いところであるが、書目18が、三宝部に関するいわばテーマ別の語彙集となっているのに対し、この書目2は、純然たる字母順語彙集の一部であると考えられる。

第3冊では、21丁まで別の筆記者の字、22丁が白紙、そして第23丁表より慈雲の直筆部となる。1aから1cまで、頁を連続したかたちで上に掲げておく。

まず冒頭に「略詮第五之一」とあり、「a字」との見出しの下、まず音写のために用いられた漢字が「阿」から順次横に並べられ、それぞれの漢字を充てた訳者・経書・辞書などの典拠が順にその下に示される。

続いて1bに示されるように、第23丁裏には「一字門」と記され、今度は釈語と典拠が、順に「本不生 大日経」「初不生 大品」以下として並べられる。

第24丁表は「二字門」となり、今度は梵字二字より成り、一字目がa字となる語彙がまず横に並べられ、釈語が順にその下に示されて、典拠も併せ明示される。その際、たとえば『唐梵文字』（書目22参照）であれば広く略示され、『梵語千字文』であれば「千文」と略される。

おそらくこういった形式は、該当の見出し語が増えてゆく段階、つまり辞典編纂途上の下書き原稿に当たるのではないかと推測される。「略詮」とは梵語字典を意味す

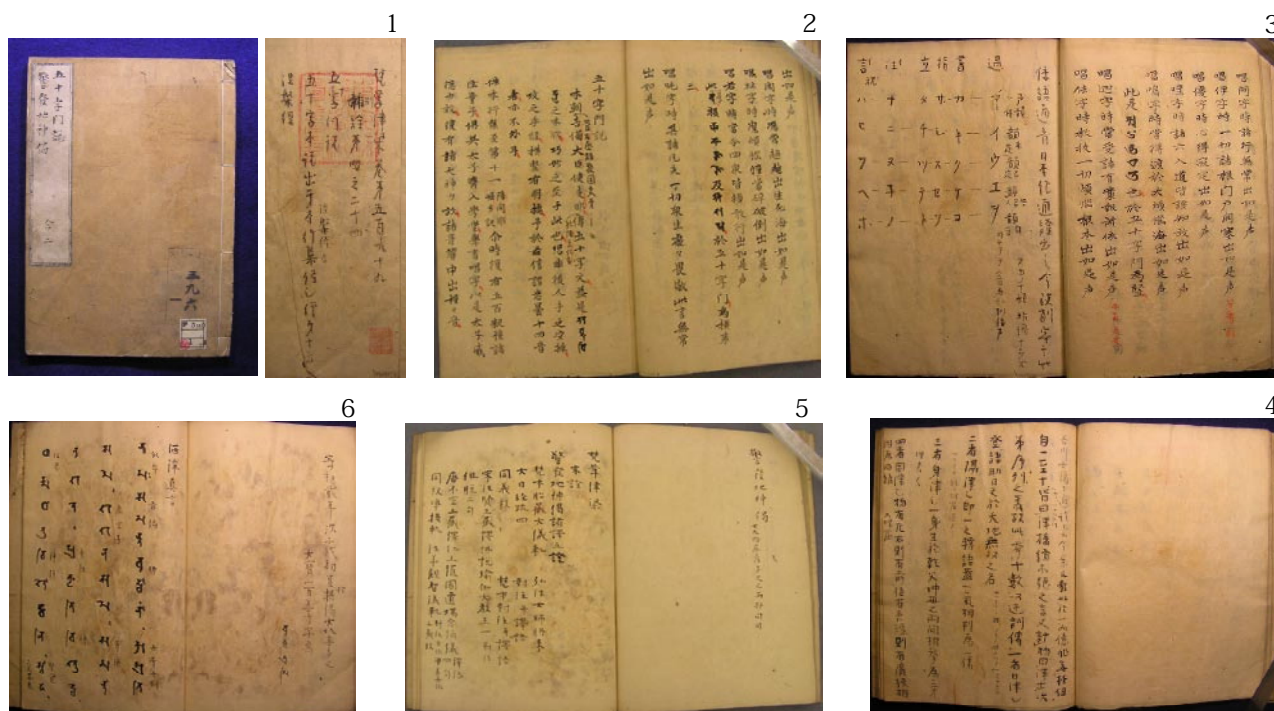
る部門であるが、次第に体裁を整え、文章化されて、整備された外見を呈するようになる。写真2以下は弟子（おそらく尼僧の一人であろうか、その名まで突き止めることはできていない）の筆跡であるが、そのような整備された段階を呈するものと思われる。

そういった意味で、慈雲直筆によるこの『略詮阿字部』は、辞書冒頭に当たる部分の、慈雲自身による下書き原稿ということになり、きわめて貴重な価値を持つものと言えよう。

ちなみに高貴寺DVDのなかには、「略詮ア」部を収めるかなりの数の筆写本が見出されるが、いずれもこのような「下書き原稿」ではなく、整備された後の、弟子たちによる筆写本がその多くを占める。慈雲自身が、本学所蔵本のような自筆による下書き原稿を二部以上作成したということは、論理的に考えてもまずありえないことであり、実際見出されていない。また本形式によるものの筆写本も、これまでのところ見当たらない。

おそらくこの「略詮」部の作成方法としては、梵字語彙のみを字数順に1頁ずつ割いて列挙しておき、その見出しの下に語義を書き込む、という下書き作業が繰り返されたものと考えられる。その結果、梵字語彙のみが見出し語として挙がりながらも、そこに語義があてがわれることなく、放置されたように見受けられる頁が多数にのぼる。ここから、略詮部に関して未完成を指摘する研究者も多いが、現代的な辞書編纂システムを想起しそこから慈雲の方法を批判するのはまったく不当であろう。上述のような慈雲たちの作業は最終的に、後出の書目20のように、漢字画数による逆引き辞典の作成へと結晶されてゆき、『理趣経講義』など最晩年の著作における「還梵」作業にも資するツールとなる。

3) チ 590-1 『五十字門説』『警發地神偈諸譯互證』(二合) 〔前者「別詮第四之二十四」、後者「末詮之四」〕



【解説】全 26 丁であり、第 16 丁まで慈雲の自筆である。この写本は合本であり、前半と後半に分かれる。

まず前半部では、第 1 丁表に慈雲の字で「梵学津梁 卷五百九十九 雑別詮第四之二十四」と記され、「雑詮」が「別詮四之二十四」と訂正され、さらに「五十字門説 五十字本説出佛本行集經第十一 涅槃經」と付記されている(写真 1)。この頁右下部に「高貴寺図書記」と寺社印がある。この印について、現高貴寺前田弘隆和上にご教示を仰いだが、まったく見当がつかないとお返事をいただいた。

次丁からは『佛本行集經』からの引用が逆転する形で綴られている。すなわち「五十字門説」として『佛本行集經』に従って記される文の冒頭は第 6 丁表に出る(写真 2)。順序を『佛本行集經』の順序に直して表せば、6 丁表⇒6 裏⇒5 表⇒5 裏⇒4 表⇒4 裏⇒3 表⇒3 裏⇒2 表⇒2 裏の順となる。本文の字は、高貴寺 DVD からの推測によれば、法樹(1775-1854)のものかと思われ、慈雲が行間注のかたちで、この「五十字門説」が菅原道真『類聚国史』の「吉備大臣伝」に拠る旨を注記している。

これに続き、第 7 丁より慈雲の字で(写真 3)、谷川士清(1709-1776)による『日本紀通証』(1760 年)第一の「附録」とされている「倭語通音」(第 7 丁)、「仮字正文」(略式、第 8 丁)、「音韻類字」(「音類」、第 9～12 丁)が引用され、第 13・14 丁は梵字による五十音図、第 15 丁と第 16 丁(表)には『日本紀通証』第二より「正通曰一物者開闢之靈也」に続く部分が移記されている(写真 4)。このうち「倭語通音」とは、四段活用動詞が五十音図の一行に活用することを示そうとしたものとして、国語学史でも引用される文献である。第 16 丁裏より 18 丁までは典拠不明であり、第 19 丁表に「梵釈」とある。

「五十字門説」とは、「四十二字門説」とともに、一般には悉曇字母の字義解釈に関する一説を指す。「四十二字門説」が、a, ra, pa, ca, na という独特の順序に従って記されるのに対し(書目 15 参照)、「五十字門説」は梵字字母の順序に従って記されるもので、『佛本行集經』のほか、『方広大莊嚴經』卷四、『文殊師利問經』卷上、『大般涅槃經』卷八、『大日經』卷二、卷五、卷六、『悉

曇字記』等に現れる。ところが本書目の場合、写真 3 に示されるように、字母の順序は悉曇風の a, ā, i, ī ではなく、a, i, u である。したがって慈雲は、『佛本行集經』に出る「悉曇五十字門」に対して神道系の「五十字(門)」を対置させ、いわば雲伝神道流の「五十字門説」を新たに立てようとしたものかと思われる。おそらく慈雲は、梵字ばかりでなく、日本語を発語する際にも、そこから神秘に向かって披かれてゆく過程を考えようとしたのであろう。筆記者と思われる法樹は晩年の弟子であり、本書目は、慈雲が神道研究を深めていった晩年の成立かと推定されよう。本著作は「高貴寺 DVD」にも見当たらず、孤本である可能性が高い。

次に後半部であるが、第 20 丁表に別の筆記者の字で「梵学津梁 末詮」とあり、以下「警發地神偈」が始まるという構成になっている(写真 5)。「警發地神偈諸譯互證」は高貴寺 DVD にも 0126 に出る。第 25 丁からは酒淨真言、請白河利沙、持地真言が順に記されている。

第 24 丁裏には「享和貳年次壬戌初夏摂陽大坂喜多之 大寶山万善寺写焉」とあり、享和 2 年(1802 年)であることから、上述のように慈雲晩年の成立を見る前半部との合本になった経緯が関心を引く(写真 6)。大阪北野万善寺は、慈雲が教化の一拠点とした正法律寺であった。『慈雲尊者全集』首巻「大阪北野大宝山万善寺歴代」には、大正 3 年海蔵忍善律師まで記載されているが、戦中期に空襲で壊滅し、現在北野地区に万善寺という寺は存在しない。一方同じく『全集』第 17 巻の高井田長栄寺靈名簿には「正法律中覚禪示寂 文化 12 年乙亥 12 月 万善寺旧住。播州産也」という記載があり、この覚禪は 1815 年に没したことが知られる。もし、この部分の字がこの覚禪によるものだとすれば、「覚」に Buddha、「禪」には達磨 dharma の名を充てようとしたものかと推測されるが、後半は drama となっている(帯気子音の誤認と、二重子音を後続の母音につなげていない誤り。正確には書目 36、曇寂の場合を参照)。それはともかく、おそらく覚禪は「菩提達磨」を梵字による筆名として用いていたのであろう。本書が万善寺所蔵であった可能性は十分にありうると思われる。

Ⅱ 慈雲の軌跡 —正法律師・悉曇学者・密教行者としての慈雲—



1



2



3



4



5

【総説】この第Ⅱ部では、執筆年代の明らかなものを中心に、慈雲の思索・活動の各時期を画すると思われる著作を展示する。もっとも今回の展示書目のうち、執筆年代の明確なものは、1752年の『方服図儀』（展示書目4）、1767-68年ごろの『普賢行願讃的示』（同7）、1768年の『七九略鈔』『七九又略』（同8、9）、1802年の『大衆金剛薩埵修行成就儀軌』（同10）に留まる。これに悉曇学者・教育者としての慈雲の面影を伝えるために『悉曇字記聞書』（同5）および『悉曇聞書』（同6）を加え、計7点がこの第Ⅱ部で取り上げられる。これ以外に、第Ⅰ部で展示した『法華陀羅尼略解』は1803年の著作である。

本目録5～6頁に掲載した「慈雲尊者の生涯と事績」を参照していただければ明らかであるが、慈雲は若き頃、法楽寺や野中寺といった戒律を旨とする寺院で修行を積み、21歳のとき、野中寺において自誓受戒を果たす。まず法楽寺は現在真言宗泉涌寺派の大本山であり、古く鑑真が開創し中世には覚盛（1194-1249）が中興の祖となった唐招提寺（律宗）、鑑真が日本に正嫡の戒律をまず伝えた東大寺（華嚴宗）、中世に叡尊（1201-90）が再興した西大寺（真言律宗）とともに「律門四派」として法灯を受け継いでいる。野中寺は、古く聖徳太子ゆかりの寺と伝えられるが、1670年に慈忍慧猛（1613-1675）が入って再興し、和泉大鳥山神鳳寺、および明忍律師（1576-1610）が開いた山城槇尾山西明寺とともに、四分律に基づく「律の三僧坊」と称されるようになる。

日本に仏教が伝来して以来、僧侶のあり方、つまり仏教教団の修行規範は、つねに問われうる問題であった。まず出家、つまり正式に比丘として僧伽共同体に加わる際の受具のあり方、すなわち具足戒の式次第が問題となる。鑑真が753年来朝し大陸から伝えた戒律は、道宣（596-667）が興した南山律宗に拠るものであった。これは、元来小乗部派の一つ法蔵部の律である『四分律』を、大乘仏教の観点から受容する一派であり、中国そして日本に広く流布する。こうして比丘は250条、比丘尼は348条を守るという「具足戒」を、「三師七証」（戒和上・羯磨師・教授師の三師および七人の証明者）のもとで受けることが正式な手続きとなり、そのための戒壇として、東大寺・筑紫観世音寺・下野薬師寺が「天下の三戒壇」として定められた。鑑真は759年に唐招提寺に移り、没年までここで法弟の教育に専心する。

ところが、そもそもの規律が拠るところの『四分律』が小乗由来の戒律であるとし、大乘仏教には馴染まないと主張したのが伝教大師最澄である。最澄は朝廷に対し、専ら大乘戒に拠る新たな戒壇の設立を要求し、それは彼の没後7日目

に認可され、比叡山に新たな戒壇が造立される。最澄が『四分律』の代わりに依拠すべき典拠としたのは『梵網經』であり、そこに含まれる「十重四十八輕戒」であった。比叡山はそれ以降、南都をしのぐ勢力を得て日本仏教の主流を成し、この事態は南都にも影響を及ぼすことになる。

ただそのような風潮に飽き足らず、元来の「三師七証」形式を復興すべきだとして、以降絶えず「戒律復興」の動きが見られるようになる。もっともその際、復古のためには、受具の際に「自誓受」を余儀なくされる。このような「戒律復興」については、主に二つの時期を取り上げることができよう。一つは上掲の叡尊と覚盛による1236年、東大寺における自誓受戒であり、もう一つはやはり上記の明忍による1602年、梶尾高山寺における自誓受戒である。

慈雲もこの戒律復興運動の末期に位置づけられ、彼自身が受具したのも、上述のように野中寺における自誓受戒であった。上図4は野中寺の比丘寮であり、現在なお受具の際に用いられている。慈雲は明忍に傾倒するところ多大であり、晩年、雲伝神道を創唱するが、その際の原点となったのは、春日大明神による明忍への神託「戒は十善、神道は句々の教え」であった（上図5は雲伝神道の拠点、磐船神社）。

ただ慈雲の場合、律学に関しては鑑真への遡源を意図して「三師七証」形式の再現を実現させる一方、西大寺の法統については、真言密教に関してのみこれを継受した。上図1は高貴寺境内内にある正法律一派の戒壇、2は唐招提寺の戒壇、3は西大寺本堂である。

慈雲に関しては、そのほか、若き頃にしばらく修行の地とした信州正安寺での大梅禪師との出会いが大きかったように思われる。悉曇学への傾注も実は予想より早く、この正安寺の頃に遡りうることが、新しい「高貴寺DVD」に収められたいくつかの写本から明らかである。また本第Ⅱ部に展示する『方服図儀』を著した桂林寺は、当時からすでに禅の系統をも受け入れていた模様で、慈雲が兼任したのもそのゆかりに沿ってのことであったかと思われる。

慈雲における『普賢行願讃』の意味は多大であったことが推測され、「梵学津梁」を構成する諸種の写本には、典拠箇所として多く『普賢行願讃』が引用される。また晩年の慈雲は、雲伝神道の活動と並行して密教関係の秘法・儀軌の伝授にも余念がなく、『大衆金剛薩埵修行成就儀軌』や『理趣經講義』といった著述はその流れの上に位置づけられよう。

4) ハ 240-103 『方服図儀』 2 巻 2 冊〔雑詮第七補三／四〕(板本)

【解説】寛延 4 年(1751 年)、三十代なかばの慈雲が、正法律運動の一環として有馬桂林寺兼任時代に著したもの。有馬桂林寺は当時、禅宗・紫野大徳寺の末寺となっており、これを慈雲が兼任した。『方服図儀』には広本と略本があり、本書は略本に該当する。『大正大藏經』に載る「梵学津梁総目録」では「雑詮補四」として挙がるため、本展示会でも雑詮のうちに含めて挙げることにしたが、高貴寺 DVD には収められていない。

慈雲の時代以前から、袈裟の作り方は永らく大いに乱れていた。袈裟の作法は「前鉤後紐」と言い(前鉤とは前の紐、後紐とは後の紐を意味する)、これを引き合わせて前で括る。この鉤紐の付け方が乱れたため、肩に掛けたときに非常に無作法になっていたのである。これは支那唐朝の末頃からすでに乱れ、殆ど千年来の弊習となっていた。慈雲は「剃髪染衣は諸佛の通儀、入道の初要、末世の真依、正法の柱礎なり。



若し尚訛替せば亦何をか言はん。故に其の聖儀を述べて之れを有志に告ぐ」と高らかに撰述の意趣を述べる。

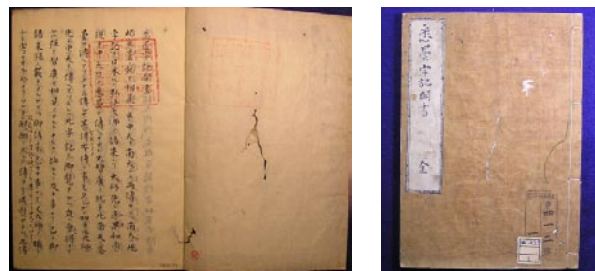
内容は 1 勸誡 2 勝徳 3 名義 4 制縁 5 正儀 6 証文上 7 証文下 8 斥非 9 問答上 10 問答下 の 10 章に分かれ、如来の親説に依り、賢聖の訓告に聴き、義理の存するところを察して袈裟衣の正儀を詳述している。

5) チ 425-1 『悉曇字記聞書』

【解説】全 63 丁である。本著作は、執筆年代は明らかでないものの、悉曇学の入門書として伝統のある智廣『悉曇字記』(書目 24)について、その内容を懇切丁寧に口授したものであり、慈雲自身の悉曇研鑽の跡がしのばれるところから、本展示会では第Ⅱ部の比較的早期に配してみた。

本学所蔵本の本文は、『慈雲尊者全集』所収のテキストとまったく同文である。序の部分に関して、『全集』には「雙龍尊者口授／小徒某甲筆受」、本学所蔵本には現表紙裏に「雙龍大和上口説」とある。

慈雲は悉曇伝承の相承諸説について、後出の安然(書目 27 参照)を「天台家安然の所立に四種の相承と云ふを立つ。1 梵天相承 2 龍宮相承 3 釈迦相承 4 大日相承 之も安然の牽強の説なれば」と批判し、東密の立場を崩すことなく、



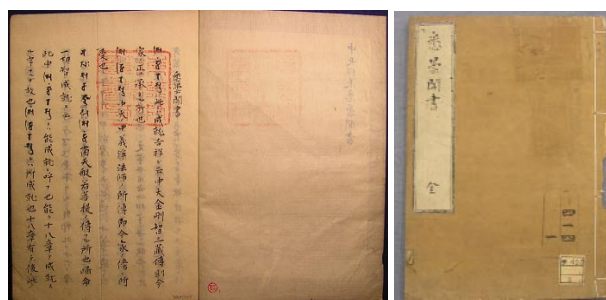
空海から宗叡に連なる相承に忠実である。

なお本著作は、(著者が明記されていないため)蔵書検索システムでは「著者不明」とされていたが、今回展示のための準備を通じて、内容的に慈雲の著作と判明したものである。

6) チ 425-2 『悉曇聞書』

【解説】全 26 丁である。本著作も、蔵書検索システムでは「著者不明」とされていたが、今回展示のための準備を通じて、内容的に慈雲の著作と判明したものであり、『全集』所収のテキストと同文である。本書は、上記の『悉曇字記』が説くところの「悉曇十八章」を順に概説したもので、悉曇入門者向けの口述書である。巻末に『先俗声和解』が付されている。

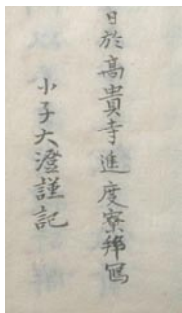
冒頭に摩多・体文等基礎事項を説明したのち、「悉曇十八章」に入る。「悉曇十八章」の構成について概略を述べておく。なお「切り継ぐ」とは、合成字を形成する際の「半体」を付すことを言う。①「体文の各字に摩多の十二点をかける(十二転させる)」、②「体文の下に ya 字を切り継ぐ」、③「体文の下に ra 字を切り継ぐ」、④「体文の下に la 字を切り継ぐ」、⑤「体文の下に va 字を切り継ぐ」、⑥「体文の下に ma を切り継ぐ」、⑦「体文の下に na を切り継ぐ」、⑧「体文の上に ra (字の上部)を加える」、⑨「第 2 章の各字の上に ra を加える」、⑩「第 3 章の各字の上に ra を加える」、⑪「第 4 章の各字の上に ra を



加える」、⑫「第 5 章の各字の上に ra を加える」、⑬「第 6 章の各字の上に ra を加える」、⑭「第 7 章の各字の上に ra を加える」、⑮「五類声各末の鼻音を、同種類の前 4 字の上に付け、これに十二点をかける」、⑯「体文各字に別摩多 r, ī, m, h 字を切り継ぐ」、⑰「体文 33 字を基本とし、各体文に 1～5 字を合成して重字をつくる」、⑱「前 17 章までに収まらない字を収める」。

詳細については専門書を参照されたい。

7) ハ 320-49 『普賢行願讚的示』〔末詮第二之〕



3



2



1



4



7



6



5



【解説】全 39 丁，原稿用紙風の縦罫線をもつ用紙に記入された写本であり，本写本がやや新しい年代のものであることを示唆する．筆記者は，「賢」「讚」などの「貝」の字の 5 画目をやや左に突出させるクセを持っているようである（1）．同じ筆法は「見」などの字にも当てはまり，これは書目 1 『法華陀羅尼略解』に関するただ一箇所の朱筆書き込みに見られた点であった（同書目参照）．本目録では，この筆記者を伎人大澄戒心師（1839-1920）かと推定している（書目 38 を参照）．伎人師の筆跡が残る写本としては，高貴寺 DVD より，たとえば 0414（『悉曇考試表白』）がある．その末尾の署名部の写真が 3 である．「高貴寺」の「貴」の字の特徴との共通性が顕著であろう．したがって本写本も，伎人戒心師による筆記であると判断して差し支えなからう．

高貴寺 DVD には，他に『日貝貝的示』というユニークな略字を用いた『普賢讚的示』が見られる（0107）が，それも慈雲の直筆ではない．『普賢行願讚的示』という同一の名称を用いた写本は，享和 4 年（1804 年）孟春（1 月）という日付の入った法樹による阿弥陀寺での写本が一本のみ収録されている（0108；上写真 4, 5, 6, 7：それぞれ高貴寺 DVD の Img0108-0002, 0011, 0012, 0071）．これを筑波大学所蔵の本書目と比較すると，書き込みや用紙の種類から，この法樹による写本の方が古いことは間違いない（写真 2 と 5・6 を比較）．おそらく法樹は阿弥陀寺にて，慈雲の親写本を写し，自らの写本を高貴寺に持ち帰ったのであろう．

『慈雲尊者全集』に収録された『普賢行願讚的示』は，高貴寺所蔵の古写本 2 点と，西賀茂神光院（和田智満師（1835-1909）所持か）の古写本 1 点を校合して出したとされ，このうち高貴寺所蔵の古写本 2 点とは，上掲の 0107, 0108 の 2 点であろう．神光院のものも慈雲直筆とは記されていないが，これら 3 点の親本として，慈雲の直筆写本がしばらく阿弥陀寺にあった可能性は高い．本学所蔵本は，おそらく伎人師が，この慈雲直筆本を阿弥陀寺にて写したものと考えられる．

この『普賢行願讚』には，仏教諸宗派の日常勤行に広く取り入れられている「懺悔文」（我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋痴 從身語意之所生 一切我今皆懺悔；第 8 頌，第 29-32 句）が含まれていることで知られる．この七字頌は般若三

蔵訳『四十華嚴』によるものであるが，他に仏駄跋陀羅（359-429）訳『文殊師利発願經』および不空訳『普賢菩薩行願讚』が異なった訳文を伝える．慈雲は不空による訳文を載せている（写真 2, 5, 6）．現在では，デーヴァ・ナーガリー表記による梵本とチベット語訳を付したテキストも公刊されている（Sushama Devi (ed.), *Samantabhadracaryā-praṇidhānārāja*, New Delhi 1958）．

慈雲は，全 62 頌より成るこの『普賢行願讚』を終生重んじ，梵本研究に勤しむばかりでなく，密教儀軌の基礎としても重用していた．慈雲による『普賢行願讚』関係の著述としては，以下のものがある．

①『普賢行願讚梵本』 梵本 4 本校訂（68 歳）．

②『普賢行願讚梵本附校異』 50 歳当時．

③『普賢行願讚諸訳互証考』 不明．

④『普賢行願讚梵本積草本』 最初の草稿．

⑤（本著作） ④を基礎に，梵文と漢訳とを各々の

字句に対照し詳細に注解を加えたもの．

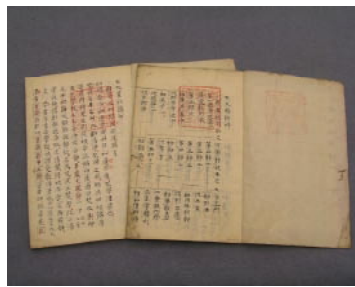
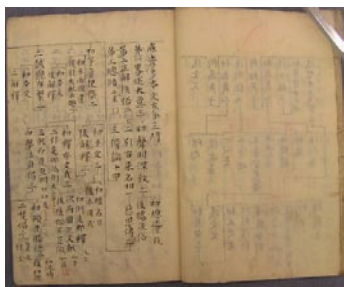
⑥『普賢行願讚梵本問書』 十巻．48 歳．護明，法護，諦濡のために講授，法護筆受．集大成．

これらを成立年代にしたがって並べるとすれば，④⑤⑥②①の順となり，③は⑤と⑥に置かれるものと思われる．

『普賢行願讚』は，上記のように『華嚴經』系の經典である．『華嚴經』は十を基数とする（『十地經』など）特徴を持ち，慈雲が『十善法語』などで説いた「十善戒」も，その基本的な理念は『華嚴經』にあると考えられる．こうして「普賢行」には「十義」（礼拝，供養，懺悔，随喜，請転法輪，請仏久住，善根廻向，解義，究竟，得益）が含まれ，この『普賢行願讚』には「十願」を読み取ることができるとされる．それは「①敬礼諸仏〔身〕 ②称讚如来〔口〕 ③広修供養〔意〕

④懺悔業障 ⑤随喜功德 ⑥請転法輪 ⑦請仏住世 ⑧常随仏学 ⑨恒順衆生 ⑩普皆廻向」であり，①②③は「至心帰命」，④は「至心懺悔」，⑤は「至心随喜」，⑥⑦は「至心勧請」，⑧⑨⑩は「至心廻向」を表すとされる．これら「至心帰命 至心懺悔 至心随喜 至心勧請 至心廻向」は「五悔」と称されて，慈雲の『金剛薩埵修行成就儀軌』にも取り込まれている（書目 10 を参照）．

8) チ 590-11,12 『七九略鈔科・七九略鈔講解』〔通詮第三之二三〕



【解説】2分冊を併せ展示する。1は18丁より成る『七九略鈔科』であり、2は42丁より成る『七九略鈔講解』である。2の末尾第39丁より「七九略鈔引証」が付されている。明和2(1765)年春、雙龍庵にて、語明、法護、諦濡等に『普賢行願讃』梵本を講じたときの筆録とされる。ただ、本学所蔵のものは『七九略鈔』の科および講解であり、前者には目次・内容概観にあたる図が掲載され、後者には講釈が載るに過ぎない。したがって本学本のみでは、残念ながら『七九略鈔』の本文そのものに接することはできない。

高貴寺 DVD との関係では、本学本1『七九略鈔科』は、0214「七九略鈔科」および0232「七九略鈔蘇漫多科全」(以上2点は同一内容)を完全に関し、その後「底彦多本文大分三門」4丁分を併せている。この4丁分に関しては、高貴寺 DVD にも同じものが見当たらず、本学のものの価値は高いかもしれない(左上写真)。一方2『七九略鈔講解』は0231「七九略鈔講解 科共策完」とまったく同一内容である。

次に掲げる書目にも見られる「七九」のうち、「七」は七例(八転声)すなわち名詞類の格変化論を意味し、「九」は二九韻つまり動詞の活用論を表す。

七例とは蘇漫多声とも呼ばれ、印欧語文法に共通の呼称に従って8つの格の名を列挙するならば、①主②対③具④与⑤奪⑥属⑦地⑧呼 となるが、伝統的な悉曇学では、順に体声・業声・具声・為声・従声・属声・於声・呼声とされる。8つ

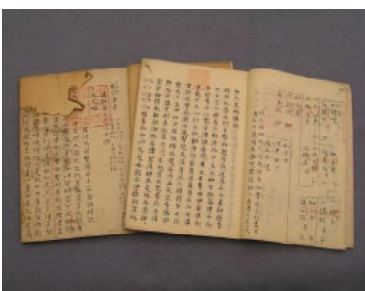
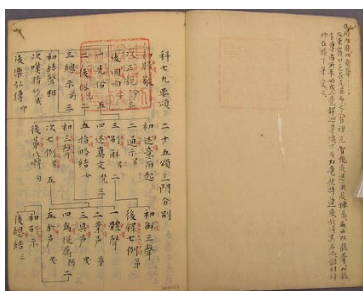
の格のうち最後の呼格(呼声)を除いて「七例」と呼ばれることがある。

この8つの格形が、それぞれ単数(一言)、双数(二言)、複数(多言)にわたって変化するため、「 $8 \times 3 = 24$ 」の語形変化を記憶する必要がある。なおこの名称と概念はすでに空海の著作にも見え、たとえば『声字実相義』には「七例八転」という形で現れている。

一方二九韻、すなわち動詞活用論についてであるが、これは別名を底彦多声とも呼ぶ。悉曇学では自説声(上士=1人称)、説他声(中士=2人称)、汎爾声(下士=3人称)という用語を用いている。慈雲は額田不動寺で成稿した『南海寄帰内法伝解纒鈔』(1758年)を執筆する過程において、義浄(635-713)著『寄帰伝』の第34章「西方学法」に梵語文法の学習階梯が記されていることから、梵語文法の体系的把握に努めるようになったものと思われる。ただ、七例の理解はほぼ十分であったと考えられるのに対して、二九韻の理解に関しては、残念ながら慈雲は現在のサンスクリット学の水準には達することができなかった模様である。

この『七九略鈔』は5巻より成り、前3巻で蘇漫多声を、後2巻で底彦多声を述べ、後者は3説声3言声(言は「数」、説は「人称」)を説明したものであった。

9) チ 590-13,14 『七九又略・七九又略講解』〔通詮第三之二四〕



【解説】前書目と同様、2分冊を併せ展示する。1は23丁より成る『七九又略』、2は44丁より成る『七九又略講解』である。冒頭に「在河内国雙龍庵小苾芻語明記」とあり、明和9(1772)年刊行とされている。前書目『七九略鈔』の追記と目すべきものであるが、残念ながら、写真より明らかなように1に焼け焦げがあり、内容判読にも支障を来す。ちなみに高貴寺 DVD との関係では、0211 および 0212 に「七九又略 全」と題された板本が載る(両者は同一)。本学本は、これと同一内容の載せ、焼け焦げはあるものの写本であるので、その価値は高い。焼け焦げ部分は高貴寺 DVD の0211 および 0212 で補うことが可能である。一方0210にも「七九

又略」が載る。これは写本ではあるものの、0211、0212 および本学本とは内容的に一致しない。慈雲による書き込み等も見られるため、おそらく草稿と見なすべきものかと思われる。また0233に「又略講解并科」があり、初丁は確かに本学本「七九又略講解」の初丁に載る「科七九要頌」(左上写真)と同一であるが、第2丁以降の内容は一致しない。もちろん前書目『七九略鈔講解』の内容とも一致していない。おそらく口述筆受でありまた「略鈔」の追記ということでもあり、「略称」および「又略」には類本が何種類か存在した可能性がある。

10) ハ 320-41 『大衆金剛薩埵修行成就儀軌』(大衆軌) <飲光補訂>

【解説】22丁より成る。本著述『大衆金剛薩埵修行成就儀軌』は1802年の成立であり、空海が請来し『御請来目録』に挙がる不空訳『大衆金剛薩埵修行成就儀軌』(『大正大蔵経』No.1119;略称「大衆軌」、以降略称を用いる)に飲光が補訂を施したものである。『慈雲尊者全集』第8巻には『金剛薩埵修行儀軌私記』(以降「全集本」とする)が載り、「私記」という附題を持ち、かつ「大衆」「成就」の語を含んでいないのに対して、本学所蔵本(「本学本」とする)は不空訳の原題をそのまま載せる。もっとも「大衆軌」「全集本」「本学本」は、冒頭箇所に関して相互に少しずつ異なるので、その次第をやや詳しく述べることにする。

「本学本」はまず、『大正大蔵経』No.1123「金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法」(略称「普賢軌」)より冒頭の「五字頌」の部分引用する(「歸命礼普賢」～「是故結集之」)。これに対して「全集本」は、まず「大正」1119「大衆軌」の冒頭句「歸命金剛薩埵能説金剛三密門。為修真言行菩薩不受動苦安樂相應以妙方便速疾成就(故)」までを載せる。その後両者は、「普賢軌」で「是故結集之」に続く部分、すなわち「若欲求解脱」以下の五字頌を載せつつ行間注を付している。そのテキストに関して「全集本」と「本学本」は同一である。以下「全集本」(1-53頁)の頁数にしたがって箇所を表記する。

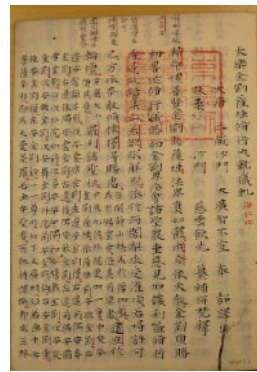
上述のように、全集本は冒頭に「大衆軌」の冒頭を掲げておき、それに対して一字下げの体裁で「普賢軌」から引用するので、本著作が「大衆軌」の注記であるとの立場は保たれている。「大衆軌」は儀軌であるので、唱えるべき真言と、その間の所作の説明によって叙述が進められてゆく。「大衆軌」で最初に登場する真言は「自性成就真言」であり、それは全集本では第7頁中ほどであり、本学本では第4丁の初め部分となる。ここまで進んでようやく、本学本も「大衆軌」の注釈であることを明らかにする。要するに本学本は、金剛薩埵と同一視される普賢菩薩への歸命儀礼を最初に置いているわけで、ここには『普賢行願讃』の研究に専心した慈雲の立場がよく現れていると言ってよいだろう。

真言密教の主要經典が『大日経』と『金剛頂経』であることは、仏教史を概説した本図録の冒頭部に記しておいた。具体的には、ここで『金剛頂経』とされるのは『金剛頂一切如来真實攝大乘現証大教王経』(3巻、不空訳;『大正大蔵経』No.865)を、一方『大日経』とは『大毘盧遮那成佛神變加持経』(七巻、善無畏[637-735]訳;『大正大蔵経』No.848)を指す。

密教は身口意にわたる即身成佛を目指すため、密教經典には「儀軌」と呼ばれる次第の解説書に当たるものが遺されている。また、金剛界・胎藏部それぞれの悟りの内容を具体的に示したのが金剛界曼荼羅・胎藏曼荼羅であり、金剛界曼荼羅が「智」(主体)と真理の世界を示すとすれば、胎藏曼荼羅は「理」(客体)と「悲」(いつくしみ)の世界を描き出すと言われる。

慈雲は正法律、悉曇学、雲伝神道だけでなく、密教行者としても法弟への秘法伝授に努め、著述としては『金剛頂経』系の儀軌への注釈を3点著しているほか、『両部曼荼羅隨聞記』その他を遺している。

『金剛頂経』系の儀軌のうち、次の7点は、いずれも内容的に『理趣経』に関わるものとして挙げられる。



1. 『大衆金剛薩埵修行成就儀軌』(大正 20-1119;「大衆軌」)。慈雲が補訂し、本学に所蔵されるものである。
2. 『金剛頂勝初瑜伽中略出大衆金剛薩埵念誦儀』(20-1120;「略出軌」「勝初(瑜伽)軌」)。
3. 『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法』(20-1123;「普賢軌」)。本学本の冒頭に慈雲が引用したのがこれである。
4. 『金剛頂普賢瑜伽大教王経大衆不空金剛薩埵一切時方成就軌』(20-1121;「時方成就軌」)。
5. 『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』(20-1122;「理趣会軌」)。
6. 『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』(20-1124;「普賢金薩軌・瑜伽念誦儀軌」)。
7. 『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』(20-1125;「五秘密軌」)。

『金剛頂経』は、元来は十万の偈より成る膨大な經典であり、18の「会」(え;舞台)において説かれたものの総体を指したものである。このうち先の不空訳3巻本は、そのうちの「初会」に当たる「一切如来真實撰経」(於・色究極天)の部分訳である。この初会金剛頂経は金剛界品・降三世品・遍調伏品・一切義成就品の4品から成るが、このうち金剛界品には6つの曼荼羅が説かれる。それは成身会・三昧耶会・微細会・供養会・四印会・一印会である(ふつう「金剛界曼荼羅」といえば、これに理趣会・降三世会・降三世三昧耶会を加えた9会のものを指す。理趣会は『理趣経』の世界を示す)。不空訳の3巻本は、金剛界品の成身会(金剛界会ともいう)に相当する部分の經典である。

『金剛頂経』系の經典において説かれる主たる観法は、「五相成身観」と呼ばれる。これは、自心が本来清浄で、その身体が仏身に他ならぬことを、月輪や金剛杵を観想することによって悟り、また仏との入我我入を明らかに観ずることを目指すものである。

先に挙げた7つの儀軌のうち、1, 2, 3は全18会の中から第8会「勝初瑜伽」(於・普賢宮殿)より、5は第6会「大安樂不空三昧耶真實瑜伽」(於・他化自在天)より、7は第13会「大三昧耶真實瑜伽」(於・金剛界曼荼羅道場)より出されるものである。

慈雲が遺した3点の儀軌注釈は、「大衆軌」「勝初軌」「五秘密軌」に対するものであるが、『全集』ではこれらすべてを載せた上で、全体に『金剛薩埵修行儀軌私記』の名を冠しているのに対し、本学所蔵本は「大衆軌」の部分しか含んでいない。したがって、題目として不空訳「大衆軌」の原題をそのまま載せているのもうなずける。

Ⅲ 慈雲の宇宙 —「梵学津梁」の写本類—



1



2



3



4

【総説】本第Ⅲ部には、筑波大学附属図書館所蔵書目の中から、「梵学津梁」を構成する主要なものを展示する。慈雲の先学による悉曇学書は「雑詮」として分類されるものがあり、これは日本における悉曇学史の概観を兼ねるかたちで、主に次の第Ⅳ部に収録する。もう一度「梵学津梁」の七部門を概観しておく。

本詮：空海および入唐八家の請来した梵文資料。

末詮：陀羅尼類の訳釈互証・解釈。

通詮：文典。

別詮：梵語関係の字典・図書。

略詮：語彙集。

廣詮：分類別語彙集

雑詮：前六部門の補遺。

以下の展示では、書目 15 として『法華陀羅尼諸訳互証』が展示され、これは末詮に分類される（他に書目 3, 21）。この「諸訳互証」というタイプの著述は、『普賢行願讃』や『般若心経』『阿弥陀経』などに関して慈雲が一貫して用いたスタイルであり、既存の各種漢訳仏典を可能な限り蒐集し、入手しえた梵本と対照させることで梵文句の意味を推定してゆく方法である。梵語文法の正確な知識がほとんど伝えられなかった江戸期までのわが国にあって、慈雲以前の悉曇学が梵字の書法・発音の習熟と梵単語・漢訳語義の収集に終始していたのに対し、慈雲が体系化したこの方法は、極めて画期的なものであったと言える。

慈雲はさらに、この「諸訳互証」で得られたデータを基に、今度は既存の漢訳仏典から梵文原典を確定する作業を開始する。これまで最晩年の著作とされてきた『理趣経講義』に関しては、そのような「還梵」の意義が称揚されることが常であったが、彼の本意はあくまで、釈尊在世中の仏法を「正法」とし、「正法律」を主唱しつつ、梵典に基づいた諸儀軌の遂行と、梵典をめぐる絶えざる観想を行うことにあった。その過程で必須となるのが梵漢逆引き字典である（書目 20）。

また上表において、「通詮」と「別詮」の区別が問題となるが、慈雲は真言宗つまり東密相承の立場に立つところから、台密の見解は採らない。この点で慈雲は非常に明確な立場表明を行うため、たとえば普通東密でも重要典籍として参観される安然の『悉曇藏』（展示書目 27）を厳しく批判する。ここからまず台密系の諸書は「通詮」には容れられない。だがそのように明確に異なった伝承に立つものは「別詮」とし、そもそも相承から外れるような、あるいは一般的な悉曇書の類は参考文献として「雑詮」に含まれる。たとえば『韻鏡』（書目 30）も、慈雲は著述の際に説明の過程で引用するため、この「雑詮」に含まれておかしくない。ただ新しい「高貴寺 DVD」では、やや異なった指針が示されていることに関しては、7 頁において既に触れた。

この「高貴寺 DVD」は、1930 年に高貴寺蔵書の調査に入った長栄寺第 14 代住職上月明厳諦了和上（1894-1959）による「高貴寺蔵書・慈雲尊者遺芳総目録 地」の分類に忠実

に従って編纂されたものである。この当時、すでに高貴寺二現存セルモノハ約五百巻ニシテ散逸セルモノ亦多カルベシ>とされていた。上掲の写真 1 が、この「高貴寺 DVD」（「高貴寺蔵書リスト 梵学津梁」、2008 年 11 月 DVD 版完成、2010 年 6 月増補）である。

この DVD 版は、期せずして、代々高貴寺に関わった人々一和上、尼僧その他一の筆跡をそのまま電子化した産物として、高貴寺史をも形成する貴重な資料となっている。この DVD 版が、梵字を含めた日本古筆学の発展に今後大いに寄与することが望まれる。本図録中で、0 に始まる 4 ケタで示される数字は、高貴寺 DVD 版の資料番号を示している。

まず主要な筆記者として、義文尼（1739-1773）、慧日尼（1740-1806）、諦濡（1750-1830；慈雲示寂後、高貴寺僧坊寺務第 2 世）、法樹（1775-1854；1833 年より高貴寺僧坊寺務第 4 世）、伎人戒心（1839-1920；1874 年より高貴寺僧坊寺務第 9 世）、伎人慈城（1885-1942；戒心の甥、高貴寺僧坊寺務第 10 世）などの筆跡が収められている。

「梵学津梁」の中核部「本詮」の筆者を一手に引き受けたのが義文尼であり、正確無比で、梵字にも優れている。そのほか尼僧としては宗悟尼（1749-1788）が秀でているが、彼女は本学所蔵『景祐天竺字源梵文新定』（書目 17）の筆記者であり、本目録でも悉曇文字の概説部において彼女の字を引用した。

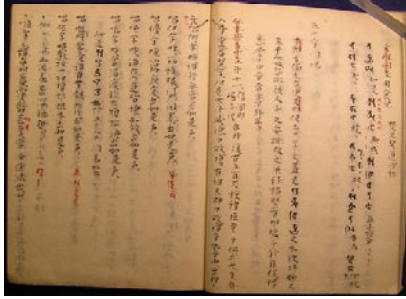
このように「梵学津梁」の完成のためには、多数の尼僧たちの協力があつた。上に掲げた写真 3 と 4 はそれぞれ、慈雲が京に尼寺として開いた長福寺と水薬師寺である。上に記した宗悟は、長福寺に住まう尼僧であった（17 解説を参照）。

長福寺は桃園天皇皇后・恭礼門院の発起によって開創された。1772 年、桃園天皇（在位 1747-1762）の第二皇子伏見宮貞行親王が早世し、悲嘆に暮れた乳母は、義文尼を介し慈雲の法話を聞く機会を得て以降尊者に深く帰依し、1774 年剃髪して慧琳尼（1718-1789）となる。これを機に、翌 1773 年には恭礼門院、天皇の生母の開明門院に十善戒が授けられ、同 11 月より『十善法語』が開講される。そして 1782 年、恭礼門院の発願により、慧琳尼と皓月尼（1756-1833）が長福寺に移住している。

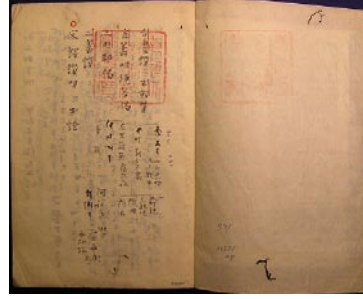
また水薬師寺は、桃園天皇の生母開明門院の発起による。開明門院は天明 3（1783）年、尊者を宮中に請じ、剃髪出家して比丘尼となった。宮中を出て尼寺に住まおうとされたが叶わず、操山尼（1751-1817）に命じ、1787 年水薬師寺の譲受が成立する。一方、京における比丘の正法律道場は、慈雲が 1804 年、そこで遷化を迎えることになる阿弥陀寺であった。

写真 2 は高貴寺食堂前であり、「大道長安に通ず」は慈雲辞世の句として知られる。おそらくこのとき慈雲には、長安にて悉曇を学び、恵果から密教を伝授されて日本に梵典を請来した空海の姿が去来していたのであろうか。

11) ハ 320-25 『諸讚詠語陀羅尼等雜集』〔本詮第一之一三〇〕



2



1

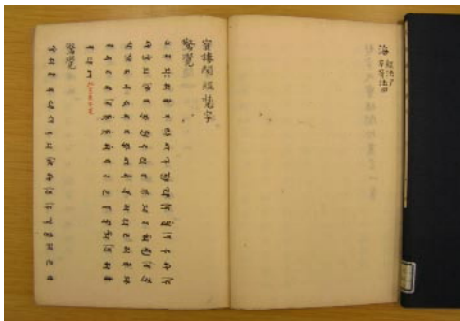


【解説】本著作は、『慈雲尊者全集』に収められた「梵学津梁総目 三」の「本詮 第一百三十 至 三十九」『陀羅尼雜集』に該当するものと推測されるため、本詮に分類されると考えた。全 39 丁より成り、巻頭頁には、写真 1 に示すように、「吉慶讚」「不動讚」「金壽明鏡等偈」「三昧耶偈」「三宝讚」と記され、続けて「宋訳讚唄 末詮」と記されている。「吉慶讚」に始まる諸讚が本詮に始まるのは間違いない（展示書目 12 を参照）ため、「末詮」に分類されるのは「宋訳讚唄」だけであると解せよう。そのほか本書には、弥陀讚、弁異義、五十字門説、六師外

道、請白河利沙などが収められている。写真 2 は「五十字門説」を引いた箇所である。「五十字門説」は書目 3 にも含まれており、本書目写真 2 の「五十字門説」冒頭部分は、書目 3 写真 2 と筆は異なるものの、まったく同一内容である。

本著作は高貴寺 DVD にも見当たらない。したがって今後慈雲の直筆本が現れない限り、孤本である可能性がある。また上記のように「梵学津梁 本詮」に記された「陀羅尼雜集」である可能性が高く、本学所蔵の意味は意外に大きいかもしれない。

12) ハ 320-37 『大佛頂陀羅尼；寶樓閣經梵字；梵字千臂甘露軍荼利真言；吉慶讚』〔本詮第一之七～十四〕



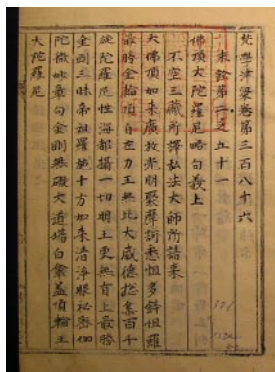
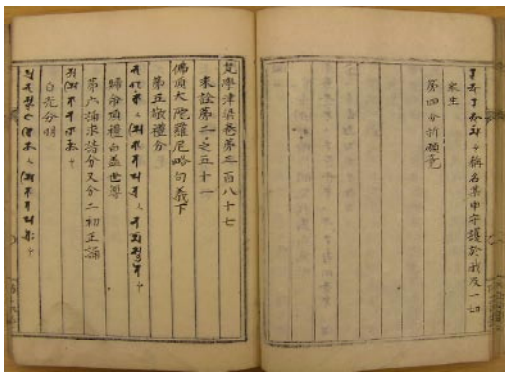
【解説】25 丁より成る。第 1 丁より第 10 丁が『大佛頂陀羅尼』、第 11 丁より第 19 丁が『寶樓閣經梵字』、第 20, 21 丁が『梵字千臂甘露軍荼利真言』、第 22 丁より第 24 丁までが『梵字吉慶讚』である。このうち『大佛頂陀羅尼』のみが横書きとなっている。巻末には「貞永元年十月廿日 一校了 於成多喜房書寫了 同年十一月一日当先師御遠忌開題了 釈門幽」とあり、この貞永元年とは 1232 年に当たる。「慈雲シューレ」による写本ではないが、成立年代が明確な写本として価値を有する。

後出の第 IV 部総説にも記すことであるが、この写本に収められた諸陀羅尼は、空海請来による「大師請来梵字真言集」（全 42 部 44 巻）に収められたものばかりである。その「梵字真言集」に載る順序で記すならば、『大佛頂陀羅尼』が第 6、『寶樓閣經梵字』が第 9、『梵字千臂甘露軍荼利真言』が第 11、『梵字吉慶讚』が第 12 部と

いうことになる。第 7、第 8 はそれぞれ『大随求真言』『小随求真言』であるが、後者に関しては『大随求陀羅尼』中に説かれる『大護大明王陀羅尼』であるとの説が有力である。そして第 10 は、空海請来梵本のうち、唯一まだに不明の『梵字金剛藏降三世讚王』である。したがって、空海請来の梵字真言集のなかで、本書目がカバーする部分は、比較的早い時期にこのような組み合わせでの筆写が確立してしまったために、逆にそこから漏れる陀羅尼が顧みられなくなったという経過を想定することができるかも知れない。

実際、高貴寺 DVD でも「本詮」部分の 0009 に『大佛頂』、0010 に『大宝樓閣』、0011 として『千臂軍荼利 併 吉慶讚』となっており、本書目の組み合わせ・順序とまったく同様となっている。

13) ハ 320-53 『大佛頂陀羅尼略句義』 2 卷 1 冊〔末詮第二之五十一〕



【解説】本著作は罫線入りの写本であり、前書目 12) に現れた『大佛頂陀羅尼』に句釈を付したものである。

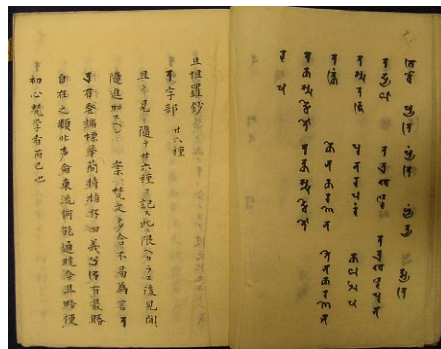
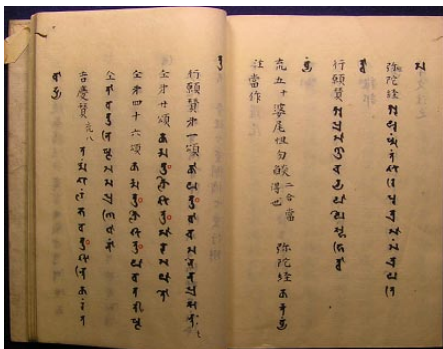
巻頭に『梵学津梁卷第三百八十六 末詮第二之五十一 佛頂大陀羅尼略句義上』とあり、上巻は 21 丁より成る。下巻は第 22 丁に、同様の記載ののち『佛頂大陀羅尼略句義下』とあり、「第五敬礼分」より始まり、22 丁より成る。したがって上下巻あわせて計 43 丁の一冊本である。上巻には「初歸命分」(第 1 丁裏)、「第二除難分」(第 6 丁裏)、「第三列位二十九名咒神明王能護者」(第 8 丁裏)、「第四祈願分」(第 11 丁裏)、「第五正誦分」(同)、「第六求請分」(第 13 丁表)、以上の初段が載り、同処より第二段すなわち「普通成就佛頂段」が始まり、第三段「白傘蓋佛頂并光聚佛頂段」は第 14 丁表より始まる。これは六分より成り、初諸難(同)、次諸鬼(第 16 丁表)、三断諸咒術(第 18 丁裏)、四祈願(第 21 丁裏)、五敬礼、六正誦求請とされる。このうち諸鬼は「執鬼」および「食鬼」(第 17 丁裏)に分かれる。

下巻は第三段の第五「敬礼分」に始まる(第 1 丁表)。第六段は二分されてまず「初正誦」が同頁に置かれ、「後求請亦除難分」が第 2 丁表より始まり、五十句より成るこの「諸神破壊」

をもって第三段が終わる(第 7 丁裏)。続いて第四段「弁事佛頂段」が始まる。これは十分に分かれ、順に初惡心除滅(第 8 丁表)、二持咒勝功(同裏)、三諸鬼止惡(第 9 丁表)、四諸崇止息(第 11 丁表)、五病惱解除(第 13 丁裏)、六諸災停息(第 18 丁裏)、七称揚勝德(第 20 丁裏)、八結界縛障(同)、九正誦真言(第 21 丁裏)、十歸敬成滿(第 22 丁表)である。このうち第三分は「初列十五食鬼名」「後出二種惡意(第 10 丁表)」に二分され、第五分は「初諸熱」「二雜病」「三諸痛」「四鬼病」「五諸瘡」に分かれる。

この『大佛頂陀羅尼』は、空海の『御請来目録』にも不空訳が『大佛頂如来放光悉他鉢陀羅陀羅尼』として挙がり、同じく梵文が『梵字大佛頂真言』として掲載されている。真言宗では『大随求真言』とともに代表的な陀羅尼の一つであり、古来無量の功德を秘めるとされる。内容をやや詳細に紹介したが、密教がヴェーダ以来の呪術を継承していることを如実に示すものであろう。高貴寺 DVD では、0090, 0091, 0095-0099 に写本が収録されている。本学所蔵本は、それらよりやや新しい年代のものであろう。

14) チ 590-2 『怛多羅鈔』 2 卷 2 冊〔通詮第三之二十三〕

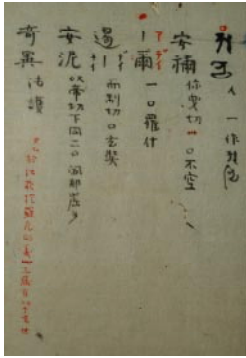


【解説】本著作は高貴寺 DVD にも見当たらず、今後慈雲の直筆本が現れない限り、孤本の可能性もありうる。上下 2 巻に分かれており、上 67 丁、下 54 丁より成る。上巻は ta に始まり、続いて sa, ya, e, i, da, na, a, ca, sma, 雑、の順に目次に語彙が掲げられている。ta 字部には、ta「怛指示之辞」に続き、tān, tam など 26 種が「指示之辞」として挙がっているが、26 種とすることについては「此に限るべからず、後見聞に随いて加すべし」とされる。見出し語に続いて『普賢行願讃』あるいは『阿弥陀經』などから文例が挙がる。

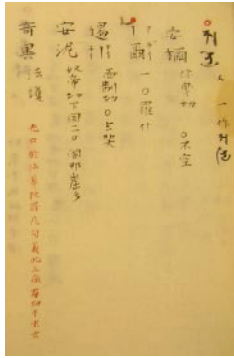
下巻は巻頭第 1 丁表にあらためて「tantra 鈔 上」と

の指示があり、第 1 丁裏より ta 字部が始まり、基本的には『普賢行願讃』の本文に基づき、主に指示代名詞の用法について、その文法的解析・解釈が記述される。第 21 丁表より「通詮之二十三 tantra 鈔 第二 tam 部」が始まる。第 32 丁表からは「梵学津梁 通詮 tantra 鈔 第四 ya 部」が、第 43 丁裏から「梵学津梁 通詮之 tantra 鈔 第五 ya 部下」が始まる。現代のサンスクリット文法では、tad-, yad- として指示代名詞と関係代名詞を取り出すが、慈雲の悉曇学が、代名詞類の用法についてはほとんどその水準に達していたということをよく示す著述だといえるかも知れない。

15) ハ 320-58 『法華經陀羅尼諸訳互証』〔末詮第二之八〕



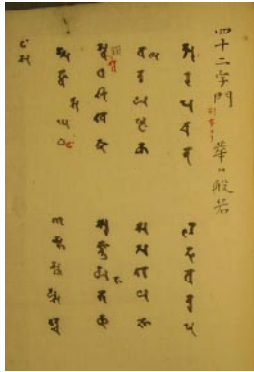
5



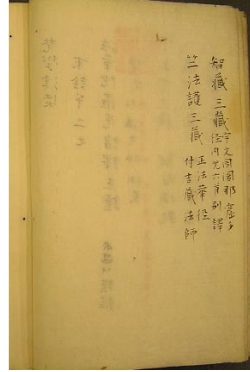
4



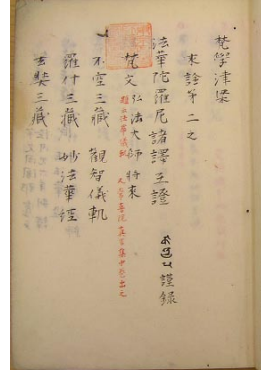
2



6



3



1

【解説】全 46 丁より成る。このような「諸訳互証」は、梵文を入手しえた各種經典儀軌について逐一徹底に行われていて、たとえばすでに第Ⅲ部の総説に記したような『阿弥陀經』『普賢行願讃』『般若心經』に関してばかりでなく、『警発地神偈』（書目 3 を参照）などに関しても、その諸訳互証が「梵学津梁」の末詮に収められ、高貴寺 DVD でも目にする事ができる。そのほか、晩年の慈雲が熱意を傾けていたと伝えられるのが『金剛般若經』の諸訳互証であり、これは法樹が慈雲の遺志を継ぎ、長年月を懸けて完成させている（書目 21）。

本著作（写真 4 参照）は高貴寺 DVD0119（-img0005；上写真 5，慈雲直筆）と体裁が完全に一致する。したがって本学所蔵本が高貴寺蔵の慈雲直筆本を書写したものであることは明らかであり、実際本学蔵のものには「別本在于阿弥陀寺」と記載がある（写真 1）。これは、本学所蔵悉曇書コレクションが、阿弥陀寺廢寺時の流出本である可能性を高める。筆者は、おそらく梵字を能くした尼僧による筆写であると思われる。智蔵を、蔵の字のくさかんむりを取った略字で表し、また竺法護については、護のこんべんをもって略すなど、日常的に漢文を扱っていたと思しき痕跡が残る。

本書目のような「諸訳互証」を通じ、既存訳を比較対照して記録することにより、慈雲は、梵文による観想への収斂を企図していた。期せずして、本展示では「諸訳互証」と「略解」（書目 1）双方の形式を明らかにすることができる。また書目 13 には「略句義」という形式が採られていたが、これも段階の上では「諸訳互証」と同じく基礎的レベルに属すと考えられ、ただ諸訳を参観することの叶わない経軌に関して行われたものと考えられよう。

『法華經』の漢文全訳としては、竺法護訳『正法華經』（286 年）、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』（406 年）、闍那崛多等訳『添品妙法蓮華經』（601 年）の三つが挙がる。本書目では、これに不空訳による『観音儀軌』（『成就妙法蓮華經王瑜伽觀音儀軌』）、および題名は記されていないが玄奘訳が挙げられ、順

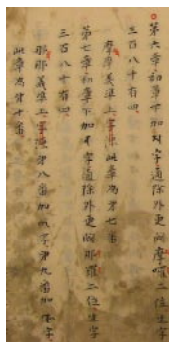
序としては、不空・羅什・玄奘・智蔵・竺法護の順に並べられている（写真 2, 3）。梵字テキストは弘法大師請来本（『梵字妙法蓮華經儀軌』）による。

玄奘に関しては、『法華經』全体を訳したとは伝えられておらず、陀羅尼咒部分のみの訳が存したものとされ、たとえば興福寺の仲算（935-976）による『妙法蓮華經釈文』（『大正大藏經』No.2189）下巻の「陀羅尼品」と「普賢菩薩勸發品」に、音訳として羅什訳のほか玄奘訳と不空訳が引かれている。慈雲が『妙法蓮華經釈文』を参観していたのかどうかについては、『釈文』に玄奘訳が引かれる箇所でも慈雲が省略する場合が多く、定かではない。当初は玄奘を含めた 5 つの訳を並記しているが、中途から玄奘訳は記されない場合が多い。ただその場合も、玄奘訳が収まるべき行間は確保してある。

上掲の 4, 5 の両者ともに、朱筆による書き込み「光云於法華陀羅尼句義此三蔵有功於末世」がある。光は飲光すなわち慈雲を意味し、「此三蔵」とはおそらく竺法護を指す。左は慈雲の直筆であるから、慈雲が自身のコメントを自ら「光云」として書き込んだと思われる。『法華陀羅尼句義』という著作は、慈雲自身には存在しないため、これは今回公開する『法華陀羅尼略解』を指すのではなく、「法華陀羅尼への竺法護による句義」を指すと取るべきであろう。

巻末に「四十二字門」が筆写されている。これは書目 3 の「五十字門」とともに、悉曇文字に意義づけをする説のひとつである。独特の順序（a, ra, pa, ca, na, la, da, va, ḍa, ṣa, va, ta, ya, ṣṭa, ka, sa, ma, ga, tha, ja, sva, dha, śa, kha, kṣa, sta, ña, rtha, bha, cha, sma, hva, tsa, gha, ṭha, ṇa, pha, ska, ysa, śca, ṭa, ḍha）に悉曇文字を並べることで知られ、また重字が現れるのも特徴である。写真 6 に現れているように、これには『華嚴經』および『大般若經』に見られるものがあり、慈雲は『四十二字門諸訳互証』を遺している（高貴寺 DVD0123）。

16) チ 590-16 『成就吉祥儀』〔通詮第三之五〕



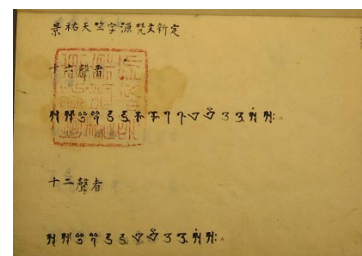
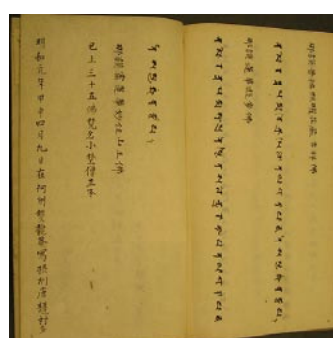
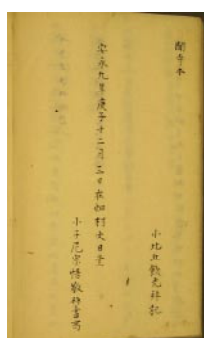
【解説】本著作は高貴寺 DVD では 0186, 0187 として収録されているものである。全 13 丁より成る。冒頭に「梵音には悉曇羅睺觀（したんらそと）なり」とあり、悉曇とは「成就」の意であるとしている。本書目の中心となる内容も、書目 6 に概要を解説した「悉曇十八章」の解説である。慈雲は『悉曇字記』（書目 24）の記述に沿って解説をおこないつつ、それとは伝承の異なる『景祐天竺字源』（下記書目 17 参照）にも言及している（左上写真）。

『景祐天竺字源』の原著は 7 巻より成り、梵字の母韻字・子音字およびそれらの合体した文字を分類列举し、若干の解説を加えたもので、現存する中国撰述の最も詳しい梵字に関する典籍であるとされる（田久保周誉著・金山

正好補筆『梵字 悉曇』91 頁、平河出版社 1981 年）。そのうち第 4 巻から第 6 巻までは、写本として高貴寺 DVD0216 に収められている。

本目録 4 頁「悉曇文字の概要」での説明には、この『景祐天竺字源』を元本とする『梵文新定』を用いた（下記書目 17 参照）。『悉曇字記』と比較すると、『字記』は子音字として、「悉曇文字の概要」の 2 から 7、計 34 文字に llam（ラム）を加えて計三十五字としつつ、その中の「悉曇十八章」部分では llam を除いている。また『字記』は十八章構成であるが、『字源』は十二番までの構成を採っている。

17) チ 590-17 『景祐天竺字源梵文新定』〔通詮第三之九〕



【解説】全 36 丁より成る。『景祐天竺字源』については上にも記したが、景祐 2 年（1035 年）、惟浄編纂になるとされる。本学所蔵の『梵文新定』は、同書に説かれるシステムにしたがって梵字を整理したものと考えられる。すなわち、いわば『悉曇字記』に対する「悉曇十八章」の関係であると言ってよからう。表見返しに『梵学津梁 卷八十三』とあるため、この『梵文新定』も「梵学津梁」に収められたはずであるが、高貴寺 DVD に『梵文新定』は見当たらず、孤本の可能性があり、価値は高い。

巻末に安永 9 年（1780 年）12 月の日付、および「在畑村大日堂」および「小子尼宗悟敬拝書写」の記がある。畑村とは、現在高貴寺のある大阪府河南町平石から山を隔てて北側、太子町畑のことであろう。この宗悟尼は、慈雲の別の著作『沙弥十数』を筆記したことで知られ、その奥付によれば「長福寺宗悟尼」とされる。また高貴寺 DVD にもいくつかの写本の筆記者として現れる。長福寺とは、京都の尼寺長福寺であり（第Ⅲ部総説参照）、皇室ゆかりの尼寺として、現在もひっそりと法灯を継いで

おられる。巻末の前頁からは、明和元（1764）年 4 月に慈雲が雙龍庵にて多聞寺の本を筆写し、これが本学所蔵宗悟筆写本の原本となったことが知られる。

宗悟に関しては『慈雲尊者全集』第 17 巻所収の「西京阿弥陀寺過去帳」7 日の項に「香山宗悟式叉摩那」として挙がる。それによれば「天明八戊申九月申刻華城愛宕町寓居卒。八日自宝称庵茶毘高井田村墓所。葬遺骨西坊之墓。存生四十歳」とあり、1788 年に没したことが知られる。本学本を写したとき、彼女は三十路に差し掛かったころだったのであろう。

なお宗悟尼は、梵字において達筆であったことが、『慈雲尊者全集』第 9 巻上所収の『悉曇章相承口説』後記より知られる。それによれば『慈雲尊者全集』編纂時に、梵字の型を取るために用いられたのがこの宗悟尼による筆記体であったという。

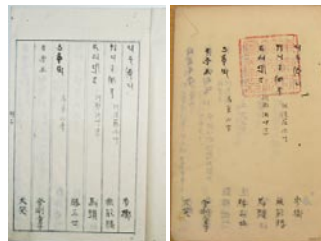
本目録において「悉曇文字の概要」に関する説明の際に用いた次第である。

- 18) チ 590-19『梵學津梁廣詮天象部』〔廣詮第六之七／八〕；
 -20『梵學津梁略詮三寶部要省 諸明王部全』；
 -21『梵學津梁略詮三寶部要省 三寶部仏宝』〔略詮第五之二／三〕



4

3



2

1

【解説】天象部 21 丁，諸明王部 29 丁，三寶部仏宝が 33 丁より成る。筑波大学所蔵本ではこの後、590-22 として曇寂の『対訳同異考』が同帙となっている。曇寂に関しては後出の書目 36 を参照。本著作のうち、まず『天象部』は高貴寺 DVD00352 に一致する。第 1 丁表より「十二宮」、第 4 丁表より「二十八宿」に関する記述がある。十二宮は師子宮より、二十八宿は昴宿より始まる。第 14 丁表には「天竺十二宮図」が示される（上写真 1）。第 14 丁裏からは「七曜」の説明があり、第 17 丁裏からは、上旬と下旬に二分して月の日々を司る神々の梵名が順次説明される。典拠となっているのは『宿曜経』すなわち『文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜経』（大正 No.1299）である。

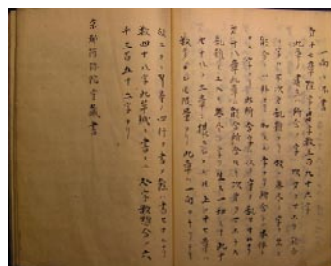
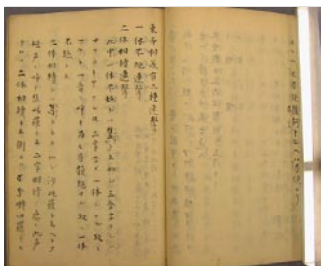
ちなみに密教では、胎藏部曼荼羅の最外院の外金剛部院に、「天文神」として七曜を含む九星、十二宮、二十八宿などの神々が描き出されている。二十八宿は月の軌道上に置かれ、日ごとに月が宿る星座（宿）を指す。

一方、『梵學津梁略詮三寶部要省 諸明王部全』は、主に『文殊大儀軌経』すなわち『大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌経』（大正 No.1191）から明王・明妃の名を取り出した梵語語彙集である。第 1 丁表は「歩擲」に始まり 6 名（2 右）、裏は「大輪」に始まり 5 名の名が挙がり、第 2 丁表に「梵學津梁 略詮第五之」と題辞、「要省 法宝 諸明王部中五大尊」とあり不動・降三世、裏に愛染まで 6 名が挙がる（3 右）。第 3 丁より第 17 丁までは同経第二に現れる明王名、第 18 丁から第 23 丁表までは同経第一に現れる明王名であり（計 279 個）、その後巻末まで 86 個の明妃名が載る。このような構成は高貴寺 DVD0325「略詮 要省明王名」とまったく同一字面である。

ところが第 1 丁に関しては、高貴寺 DVD0324「略詮要省」では、img0043 左「歩擲」が見えるが、その前に「略詮要省明王名」とあり（本学本では現表紙裏の元表紙に記されている）、img0044 右にかけて内容的に同一ながら整備された形で再現され、img0045 右「愛染」の後「已上諸軌」と締めくくられる（3 左；3 右は本学本第 2 丁裏・第 3 丁表）。本学本と高貴寺 DVD0325 の次の段階が DVD0324 であるということが判明する。なお高貴寺 DVD0325 の第 1 丁はその「馬頭」までが慈雲の字である（2 左、右は本学本）。したがって本学本は 0325 を筆写したものであろう。

また『三寶部仏宝』も『文殊大儀軌経』から諸尊者などの梵名を取り出したもので、第 1 丁（写真 4）に続き、第 2 丁より第 11 丁表まで 130 尊者、第 17 丁裏まで 66 尼尊者、第 19 丁裏まで 25 大仙、第 20 丁表が 6 羅睺羅王、第 22 丁表まで 14 迦樓羅王、第 24 丁表まで 20 緊那羅王、第 25 丁表は阿修羅王（「無数」）、第 30 丁表まで 73 大曜、そして巻末までは 41 星の梵名と漢語訳を掲載している。このような内容は、上記高貴寺 DVD0324 の img0063 左から img0083 までと内容的に一致する。高貴寺 DVD0324 では img0063 右面に、本学本上掲『諸明王部全』の末尾面（「以上 86 明妃出文殊大儀軌経」）が来るので、本書目の第 2、第 3 分冊は合本をなすということが理解される。

19) チ 590-23『梵文助声歌／山門東寺連声弁』； 前半〔雑詮第七之十〕、後半〔雑詮〕



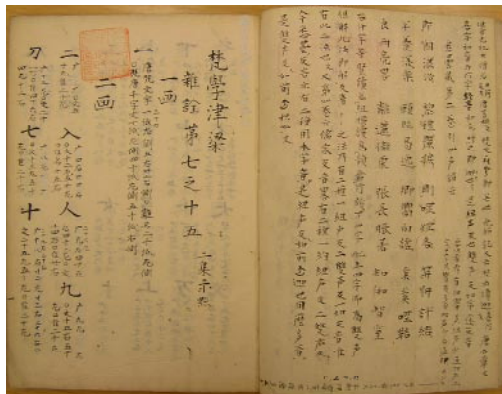
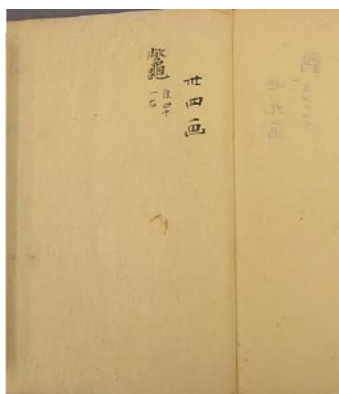
【解説】全 24 丁より成る。第 6 丁までが「梵文助声歌」、第 7 丁に白紙をはさみ、第 8 丁に「山門東寺連声弁 附合字連声弁字記科并韻鏡目次附十八章建立」、第 9 丁より「山門東寺連声弁」、まず「山門相伝有四种連声 一自音成他声 二他音属自声 三十五盞迦章（※悉曇十八章の第 15）連声 四加他摩多連声」である。第 12 丁より「東寺相承有二種連声 一体不絶連声 二体相続連声」。第 17 丁より「悉曇字記科」、第 18、19 丁が白紙、第 20 丁より付記である。

本著作の前半部は高貴寺 DVD には見当たらず、高価値の写本である可能性がある。末尾に「京都阿弥陀寺蔵書」と記さ

れているため、本書目を含む一群の悉曇書籍が、阿弥陀寺廃寺時の散逸により本学に伝えられたことをうかがわせる（写真右、中）。『慈雲尊者全集』所収の「梵學津梁総目録」には、「飲光宝曆新年（1751）述」とある。

後半は、高貴寺 DVD では 0411 と同一であり、悉曇連声における台密と東密の相承の違いを説明した著述である（写真左は本学本）。慈雲は、台密の伝承は基本的に受容しないが、説としては把握しており、このように「雑詮」に分類している。

20) チ 590-18 『唐梵雜名千鬘畫引』〔別註第四之一／二〕

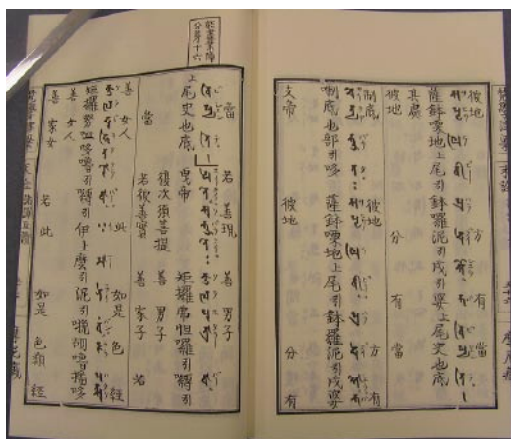


【解説】全 52 丁より成る。梵語語彙に対し、漢字による語釈を付した三作品（『唐梵文字』『梵語千字文』『梵語雜名』）について、その各編に見られる語釈漢字を総画数順に配列し、その掲載頁を「广×右 ○ 文×左 ○ 佳×右」のように、略字と頁数（×）を用いて示したインデックスである（書目 23 を参照）。つまりこれは漢字から梵語語彙を引き当てるための「画引き漢梵辞典」である。その際、原点となる漢字から、求める梵語語彙を突き止めるまでには、言うまでもなく「意味」が媒体とされているわけで、検索をスムーズにするため漢字はすべて一文字に限定されている。したがって、慈雲シューレにあっては、「意味」の世界がすべて漢字一文字ずつに集約され脳裡に留められていたということになる。インド・ヨーロッパ語を学習する際には、動詞を中心とする語根の理解が有効であるが、語根・語基を記憶するには漢字一文

字を当ててゆくのが効率的である。この方法は、実は非常に機動力を秘めた適確な方法ではないかと推測される次第である。

このような「画引き漢梵辞典」の存在は、慈雲がすでに晩年の『理趣經講義』で展開するような「還梵」の発想を抱いていたことをうかがわせるに足りる。三作品のうち本学図書館には『梵語千字文』の写本は収められていないが、『梵語雜名』の板本（慈覺大師円仁〈793-864〉請来）、および『唐梵文字』の写本は所蔵され、この『唐梵雜名千鬘畫引』に挙がる各々の頁数と一致することが確認されている（書目 23 下部「補説」を参照）。おそらく本書目の題名『唐梵雜名』は、一般名詞ではなく、『唐梵文字』と『梵語雜名』とを掛け合わせた名かと推測される。ちなみに漢字は写真のように、一画から三十四画にまで及んでいる。

21) 183.2-J55 『梵文金剛般若經諸訳互証』河州高貴寺沙門法樹 纂校 梵学津梁卷三百二十〔末註第二之十二〕



【解説】本書はこの展示会のために、高貴寺現任職前田弘隆和上より贈呈されたものである。慈雲は最晩年『金剛般若經』の講解をたびたびおこなったことが伝えられており、それはまず 1800 年、弟子筆受により『金剛般若波羅蜜經講解』一卷として成稿される（『慈雲尊者全集』巻 7 所収）。だがその後慈雲は 1804 年の秋、京で養生する間に小康を得て、再度金剛經を講じたものと伝えられる。

智幢法樹（1775-1854）は現在の大阪府出身、豊前から慈雲の威徳を慕い、はるばる高貴寺を訪ね慈雲に師事

した。ときに 1797 年、慈雲 80 歳、法樹は 23 歳であった。慈雲が示寂したのは弟子たちについて梵学の研鑽に励んだという。1833 年、長栄寺第 6 世として晋住、高貴寺僧坊寺務第 4 世ともなる。慈雲が『金剛般若經』についても「諸訳互証」を行うことを望み、果たせずにいたのを、法樹が慈雲の遺志を継ぎ、十年以上をかけて完成させたものである。慈雲門下には慈雲ほどの梵学者は遂に現れなかったとされるが、その中で傑出していたのが法樹であったのは間違いないであろう。

IV 梵学史の金字塔「梵学津梁」 ― 梵学史を辿る ―



1



2



3



4

【総説】第IV部には、悉曇学史上の名著とされる諸作品を展示する。それらの諸書も、すべて「梵学津梁」に収められている。以下に、本展示に出品される書目を「梵学津梁」の7部門にしたがって分類しておこう。

本説 11)『諸讃訳語陀羅尼等雑集』

12)『大佛頂陀羅尼；寶樓閣經梵字；梵字千臂甘露軍荼利真言；吉慶讃』

末説 3b)『警發地神偈譯互證』7)『普賢行願讃的示』

13)『大佛頂陀羅尼略句義』15)『法華陀羅尼諸訳互証』

21)法樹『梵文金剛般若經諸訳互証』

通説 8)『七九略鈔』9)『七九又略』14)『恒多羅鈔』

16)『成就吉祥儀』17)『景祐天竺字源梵文新定』

24)『悉曇字記』(唐・智廣)25)『中天悉曇章』

26)『悉曇私記林記』(宗叡)

別説 3a)『五十字門説』20)『唐梵雜名千鬘畫引』

22)『唐梵文字』(唐・全真)

23)『梵語雜名』(唐・礼言集／眞源較)

27)『悉曇藏』(安然)28)『悉曇要訣』(明覚)

32)『多羅葉抄』(心覚)36)『梵字通同考』(曇寂)

略説 2)『梵学津梁略詮阿字部』

18b/c)『梵学津梁略詮三寶部省要 諸明王部全』『梵学津梁略詮三寶部省要』

廣説 18a)『梵学津梁廣詮天象部』

雑説 4)『方服図儀』19)『梵文助声歌／山門東寺連声弁』

29)『梵字形音義』(明覚)30)『韻鏡』31)『磨光韻鏡』(文雄)

33)『悉曇字記創学鈔』(杲宝・賢宝)

34)『悉曇考覈抄』(宥快)35)『悉曇三密鈔』(浄厳)

37)『梵字悉曇章稽古録』(寂厳)

このように、本学所蔵書のみで「梵学津梁」の7部門を構成しようという事実は、実に画期的なことであろう。

このうち本説は、空海や入唐八家らにより本邦に請来された梵典を主とする部である。入唐八家とは、空海を含め唐に渡った僧の総称であり、空海の請来本は同著『御請来目録』に、また入唐八家の請来本は、安然(書目27参照)による『八家秘録』に挙げられている。その八人とは、台密から伝教大師最澄(767-822)、慈覚大師円仁(794-864)、智証大師円珍(814-891)、東密から弘法大師空海(774-835；書目25参照)、常曉(?-866)、円行(799-852)、慧運(798-871)、

そして書目26に挙がる宗叡(809-884)である。

空海は、不空(705-774)訳の密教經典・儀軌を中心とする大量の新訳仏典に加え、梵字真言讃等四十二部四十四卷、および曼荼羅を含む仏像・道具などを請来した。慈雲は「梵学津梁」の巻頭を成す「本説」に、空海請来による「四十二部四十四卷」を、『御請来目録』に載るのと同じ順序でまず掲げている。これは、本邦における悉曇学が、事実上空海の入唐(804年)を起点とすることを如実に物語っている。

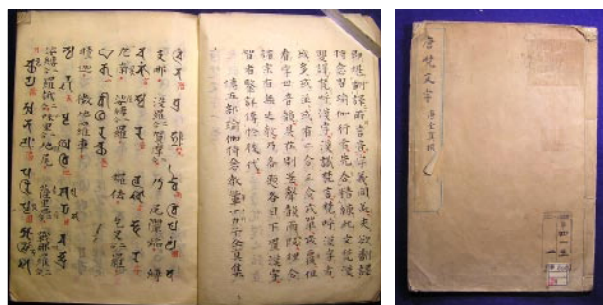
この空海請来による梵字真言は、写本により伝えられているものの、「四十二部四十四卷」を完備する写本は未だに発見されていない。それらの梵字真言を編集収録しようとする試みは、近くは長谷宝秀師によって行われ、「大師御請来梵字真言集」として、参考展示39に展示する『長谷宝秀全集』第4巻および第5巻のうちに、上下巻のかたちで収められている。長谷師によるこの梵典収集の際、東寺御影堂宝庫に31部33巻、高野山金剛三昧院に27部所蔵されていることが判明した。長谷師は東寺本を核に、既に開版されていた「梵字悉曇章」を加え、不足する10部のうち高野山本から5部5巻を、残るもののうち3部3巻を高貴寺所蔵「梵学津梁」の慈雲真筆本から補ったことが知られている。この3部とは『毘盧遮那三摩地儀軌』『十六大菩薩真言』『文殊五字真言儀軌』であり、それぞれ高貴寺DVDの0004、0020、0024に該当する(長谷師によればなお2部2巻が不足するとされたが、書目12の解説にも記したように、そのうち『小随求真言』は『大護大明王陀羅尼』に相当するとされる)。

本展示に出品される書目12『大佛頂陀羅尼；寶樓閣經梵字；梵字千臂甘露軍荼利真言；吉慶讃』(第Ⅲ部参照)は、慈雲シューレの手になる写本ではないが、空海の「御請来目録」42部の中では、ここに収められた真言は順に第6、9、11、12部に位置する。空海請来の梵本が、『御請来目録』記載の順序で広く流布し、密教儀軌に使用されたことが知られる。上掲の写真2は、空海が823年京に開いた東寺の五重塔、3は同観智院であり、観智院は書目33に関わる。空海是最澄と異なり、南都との密接な交流を維持し、810年東大寺の別当に任じられた。写真1は東大寺の大仏殿である。また写真4は、書目35の著者、慈雲に先駆けて悉曇の大家とされた浄厳(1639-1702)の開創になる東京湯島の霊雲寺である。

22) チ 590-5 『唐梵文字』(唐・全真)〔別詮第四〕

【解説】梵単語を掲げ、それに対して左側に漢字で読み方を示し、梵語の下部に朱筆漢字でその意味を付した対訳語彙集の一種で、ほぼ8世紀ごろに作られたものと考えられる。配列が義浄(635-713)の撰になる『梵語千字文』に似ているところから、おそらく『梵語千字文』からこの『唐梵文字』が作成されたものと考えられている。入唐八家の一人円行(794-852)によって839年に請来された。全真については、密教僧であったということ以外には知られていない。

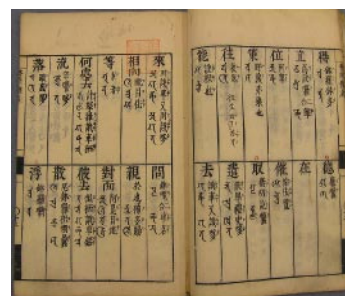
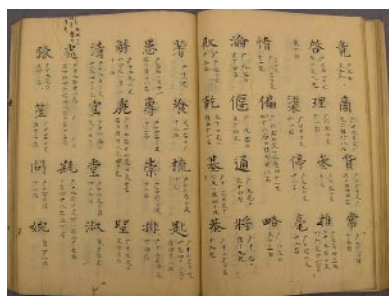
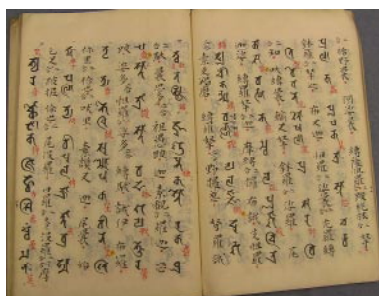
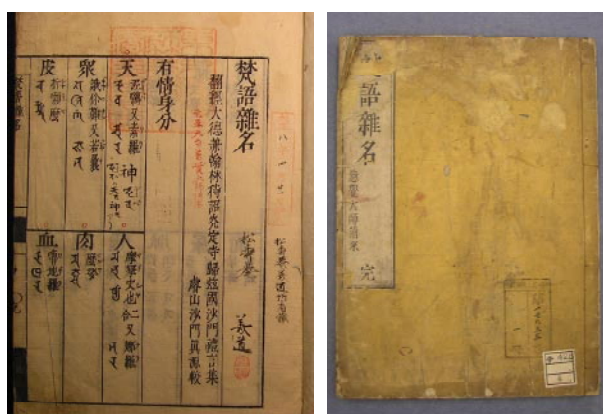
義浄の『千字文』は、玄奘(602-664)が、グプタ朝時代(4-5世紀)の純梵語(サンスクリット)主義を反映させた「新訳」でもって鳩摩羅什(344-413)や真諦(499-569)の「旧訳」を刷新したのに対し、さらに「梵



漢対訳」という画期的な形式をもたらしただことで有意義であるとされる。なおふつう、仏典漢訳史の上で「四大翻訳家」といえば、鳩摩羅什、真諦、玄奘、それに密教経軌に特化して訳業をおこなった不空(705-774)の4人が挙げられる。

23) チ 425-4 『梵語雑名』(唐・礼言集／眞源較)〔別詮第四之四〕(板本)

【解説】1巻より成り、人体・形体・色彩・感覚・動作・方位・心理・数量・生活資材・社会階級・季節・時間・気象・動植物・地名・器具・衣住・家族等に関する漢語1250余りの各語とそれに対応する縦書き悉曇文字の梵語、その漢字音写を列記したものである(田久保周誉著・金山正好補筆『梵字悉曇』83頁、平河出版社 1981年)。本学所蔵本には享保17(1732)年の日付があり、これは『大正大蔵経』第54巻(No. 2135)に本作品が収録された際、原本として用いられたのと同じ板本ということになる。



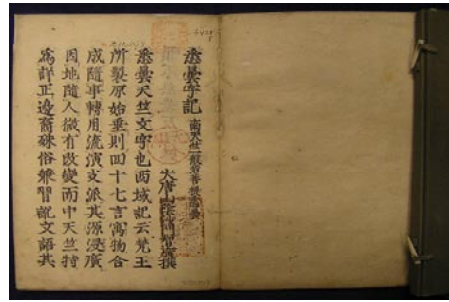
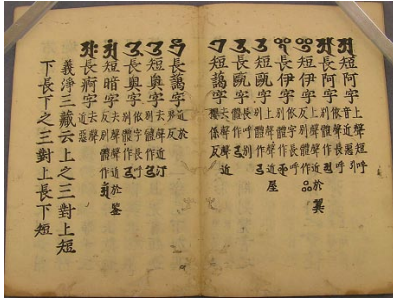
【補説】ここで、前出20の『唐梵雑名千鬘畫引』が、本学所蔵の上掲22『唐梵文字』および23『梵語雑名』を用いて編纂された逆引き辞書であるということを示してみよう。

たとえば上中写真は『唐梵雑名千鬘畫引』であるが、このうち一番左列にある「問」の字を取り上げることにしよう。「問」の下には「广二十右 佳十三右」と記されている。ここで「广」とは「唐」の略示、「佳」は「雑」のツクリによる略示である。つまりこれは、「問」という字が『唐梵文字』では第二十丁右に現れ、一方『梵語雑名』では第十三丁の右に現れる、ということを表現したものである。上左写真は『唐梵文字』であるが、写真の左面が第二十丁であり、その左から3行目に朱字で「問」の字が出るのが見える。本図録では「丁」に対し、読み進む順にしたがって「表」次いで「裏」という表示の仕方でも箇所の表記をしてきたが、ここでは丁を折りたたまずに開いた状態で想定し、その「右面」「左面」という認

識をしていることが理解される。同じく上右写真は『梵語雑名』の板本であり、左が第十三丁に当たるが、その第1行目下段に「問」の字がある。

総じて板本は、版木が同一であれば頁上の字面も同じになるが、写本に関しても、本展示の関係で調査した限りでは、ある原本が筆写される場合、行や頁、字の配置まで、基本的に原本の状況がそのまま写し取られている(書目15など)。これは慈雲シュレーの教導方針であったのかも知れない。したがって、上に例示しえた限りの証拠では、もちろん上中の『唐梵雑名千鬘畫引』作成者が、本学所蔵の『唐梵文字』写本そのものおよび『梵語雑名』板本そのものを用いて辞書を編纂したということは、直ちには確言し得ないものの、これら3つの書目が固まって本学所蔵書となったことから考えて、これらの写本・板本が使用され編纂作業が行われたということは、ほぼ間違いないものと思われる。

24) チ 425-8 『悉曇字記』(唐・智廣) 貴重書 ([慶長・元和年間]) [通詮第三之三]



【解説】智廣については、詳しいことは知られていない。本書の記述に拠れば、著者が南天竺（南天）の般若菩提から五台山において享けた悉曇の用法を記したものがこの『悉曇字記』であるとされる。

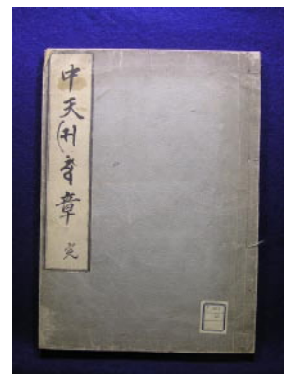
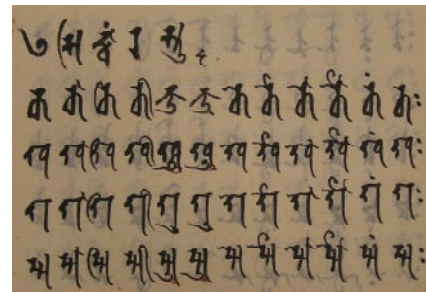
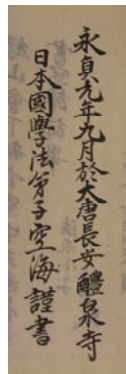
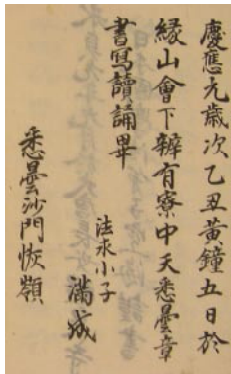
悉曇には、特に読み方に関して中天相承と南天相承の二系統がある。本図録では、慈雲が東密であることもあり、冒頭の「悉曇文字の概要」以来、中天相承に基づいてきたが、本書は上記のように南天相承による。読み方に関して、たとえば母音字は、本目録では順に「ア、アー、イ、イー、ウ、ウー、エ、アイ、オ、アウ..」としていたが、本書目の伝える南天相承では、上写真左に見るように、順に「ア、アー、イ、イー、ウ、ウー、エ、エー、

オ、オー」である。

この書は現在の形では前段と後段に分かれ、前段の最後に「悉曇字記」と記されて一旦記述が終わるかのような印象を受ける。そして前段・後段ともに摩多（母音）、体文（子音）、および「悉曇十八章」を解説しているが、後段のほうが詳しいことから、おそらく後段は前段の注釈であろう、というのが現在の通説である。

『悉曇字記』は、慈雲自身が書目5において『悉曇字記聞書』を記しているように、およそ本邦における悉曇学の基礎中の基礎とも言うべき書目であるにもかかわらず、高貴寺DVDに「悉曇字記」という題目で挙がるものが皆無であるのは不思議である。

25) チ 425-40 『中天悉曇章』(空海) [通詮第三之一?]



【解説】空海（774-835）については、すでに本目録で随所に言及してきたが、その入唐（804年）と帰朝による多数の密教経軌・梵典の請来でもって、本邦に悉曇学をもたらした人物としてまずは意義づけられよう。

本学には、標題に悉曇文字の入った『中天 siddham 章』と題された作品が所蔵されている。もっとも空海の『御請来目録』には、上記の『悉曇字記』、および『梵字悉曇章』が挙げられており、空海はその『梵字悉曇章』をもとに『大悉曇章』を著したとされるのみで、『中天悉曇章』という作品を請来したという記録はない。『大悉曇章』は『悉曇字記』とは相承が異なり、中天相承のものであり、そこで説かれる文字も多く、かなり難解なものも含まれている。したがって東密にあっても、空海請来ということで『悉曇字記』およびそこに含まれる「悉曇十八章」を学習することが伝統となり、ただその際に、上記のように南天の発音ではなく、中天音にして学ぶという方法が採られた。

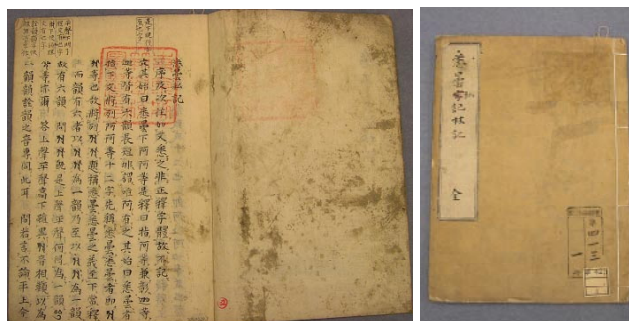
本書の内容は、事実上「十八章」であり、しかもその

うちの第14章までしか収められていない。第5章（va字を付す章）の部分に大幅な乱丁があり、h字とkṣa字にvaを付した2行分（この章の末尾に当たる）の1頁しか収められておらず、脱落した計3丁分は、第7章と第8章のあいだに移っている。冒頭は写真に見るように「悉曇羅摩拏（したんらそ）」と記され（書目16参照）、ka行の十二転から始まっている。これは「悉曇十八章」のスタイルである。要するに本書は、『悉曇字記』のうち「悉曇十八章」の第十四章までを取り出しつつ、それを『中天悉曇章』と名づけたものかと思われる。奥書には写真のように「永貞元年」の記載があり、これは805年、空海入唐（804）の翌年に当たる。ちなみに高貴寺DVDには中天に由来する同種のものがいくつか収められているが（0225, 0226, 0229, 0230）、巻末に空海がこれを写したこと、などを記すものはないため、本写本の伝承は残念ながら明らかではない。なお参考展示の書目40③いをも参照。

26) チ 425-5『悉曇私記林記』 宗叡 [通詮第三之四]

【解説】宗叡(809-884)は入唐八家の一人。14歳にして比叡山に入り、831年に具足戒を受け、比叡山延暦寺初代座主義真(781-833)について天台学を学び、智証大師円珍(814-891)に師事して台密を伝授され、また南都興福寺の義演より法相学を学んでいる。後に東寺に入って実慧、真紹より東密の伝授を受ける。入唐八家の中では最も高齢であった。862年、真如親王にしたがって入唐し、その後親王一行とは別行動を取り、五台山に至る。密教に関しては、青龍寺の法全、慈恩寺の造玄などから受法し、興善寺の智恵輪三蔵にも師事している。865年に帰朝、請来の経論儀軌・曼荼羅を上表し、清和天皇に大いに喜ばれ、のちに880年、天皇が出家する際、戒和上を務めた。空海以後の入唐諸家のなかでは最も博識であったため、「入唐僧正」と称されることもある。

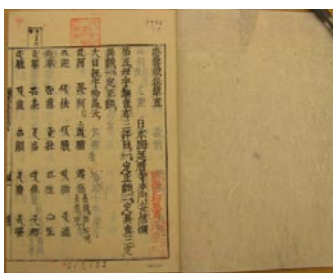
『悉曇私記』は『悉曇林記』とも呼ばれるが、これは宗叡が京都禅林寺に晋住し「禅林寺僧正」と呼ばれたこと



による。智廣『悉曇字記』の注釈書としては、最も古いものに属する。

慈雲は安然などの説を廃し、代わりに採るべきものとしてこの宗叡の『林記』を挙げることが多い。それは宗叡が、慈雲と同じく東密相承に属し、空海以来の相承を墨守することによる。

27) チ 425-13『悉曇蔵』 8巻8冊 安然 [別詮第四之七] (板本)



【解説】安然(841-915)は天台宗の僧で台密の完成者。近江国の出身とされ、若くして比叡山に上り、慈覚大師円仁(794-864)に師事し、859年に具足戒を受け、以降顕密両学に通暁する。入唐の認可を受けて大宰府まで赴いたものの、故あって果たせなかった。学問的に台密・東密の融合を図ろうとしたようで、天台宗のことを指して「真言宗」と呼ぶなど、天台の密教化を加速させた。のち、比叡山に五大院を構えて著作と研究に没頭した。

安然は、特に入唐八家が請来した目録資料を精査して『八家秘録』2巻を著し、その中で初めて「諸悉曇部」を設け、悉曇を独立した項目で扱っている。

著作『悉曇蔵』8巻は彼の悉曇学の集大成である。この書は「梵文本源・悉曇韻紐・章藻具闕・編録正字・母字翻音・字義入門・字義解釈・録十八章」の8篇より成り、各篇に三義を立て、計二十四門に分類し、広く悉曇関係の文献を引用して、その形態・音韻・字義を詳細に解説している。古来、天台・真言両宗徒より等しく尊ばれてきた。

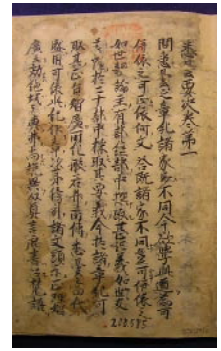
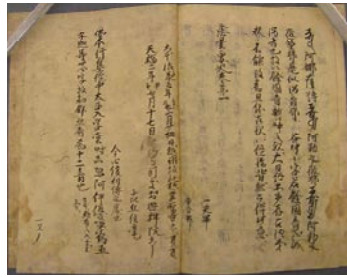
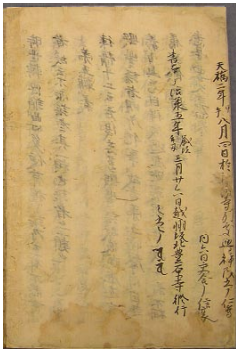
こうしてこの『悉曇蔵』は、日本の悉曇学の主流を形成してきたといっても過言ではない重要書目であるが、

慈雲自身は相承を異にすることもあり、随所に安然の説を批判している。その理由の一つが、前掲書目19に挙げたような、台密と東密とで異なる連声の考え方にある。

従来の「梵学津梁」の目録類では「別詮」に収められており、相承を異にしつつも慈雲が敬意を表したものと考えることができた。もっとも慈雲自身の言からすると、「雑詮」に入っても不思議ではなかったと言える。実際、新版高貴寺DVDでは「雑詮」に収められてしまっている(0353-0360)。これが、慈雲が後に分類の考えを改めたことによるのか、新たに分類を施した諦了和上の考えによるのか、現時点では不明である。ちなみに次の『悉曇要訣』は、従来の「目録」では別詮扱いであったが、こちらは新版高貴寺DVDでも別詮に分類されている。

本学所蔵本は1789年の刊行になるものであり、『大正新脩大蔵経』が基にした原本が1794年であるのに対し、それよりも遡るものである。これは大変に貴重なことだと言えよう。

28) チ 425-30 『悉曇要訣』 4 巻 4 冊 明覚 貴重書 (天福 2[1234]) 〔別詮第四之十〕



【解説】明覚（1056-1101）は天台宗の僧，日本悉曇学中興の祖と言われる。はじめ比叡山に住し，のち 38 歳までには加賀の温泉寺に隠遁したようである。なお書題は，本学所蔵本を含め，写本では「要決」，版本では「要訣」の字が用いられるが，本図録では煩雑さを避けるため「要訣」に統一する。

安然によって大成された日本悉曇学は，平安中期以降，かなり衰微したと推測され，ことに台密においては安然の後継者がおらず，わずかに東密が仁和寺で伝えられただけであつた模様である。明覚はこの状況下にあつてほとんど独学で研究を進め，比叡山や三井寺にあつた文献を渉猟し，梵字文献に立ち返って証拠を探り，また韻書をひもといひて新鮮な学説を展開した。最初の著書である『悉曇大底』（1084 年）から，『反音作法』（1093 年），『梵字形音義』（1098 年），そして『悉曇要訣』（1101 年以降）にいたるまで，よくその説の展開の跡が示されている。

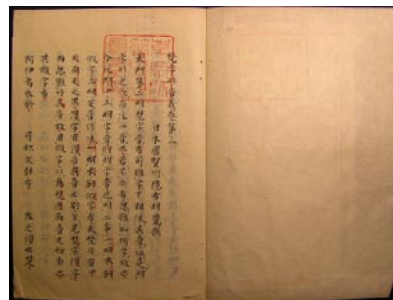
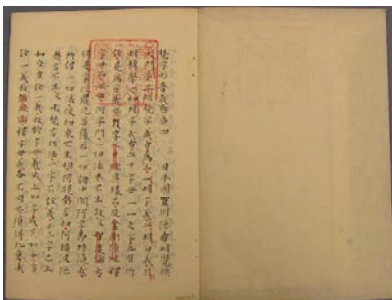
明覚によるこのような方法のために，これ以降悉曇学は非常に日本的な色彩を帯びることになり，また明覚は国語学史上にも多大な成果を挙げることになった。

『悉曇要訣』は，梵語の諸訳・悉曇音・字相・字義などに関する著者の豊富な学殖を問答体によって記したものであり，平安時代後期の悉曇学書の中で最も高度な著述とされる。

本学所蔵本は，巻一の奥書および巻四の奥書より，治承 5（1181）年の書本を天福 2（1234）年に写したものとされる（左写真 2 葉）。したがって室町時代の筆写本であることがわかり，これは本邦で最も古い写本である（『国語学大辞典』「悉曇要訣」の項）。

明覚は陀羅尼の釈義にも優れており，『大佛頂陀羅尼勘註』『大随求陀羅尼勘註』（書目 12，13 参照）はいずれも信頼すべき典拠として引かれる。

29) チ 590-4 『梵字形音義』 4 巻（巻 1-2 欠） 2 冊 明覚 〔雑詮第七〕



【解説】全 4 巻本であるが，残念ながら本学には第 3，第 4 巻しか所蔵されていない。

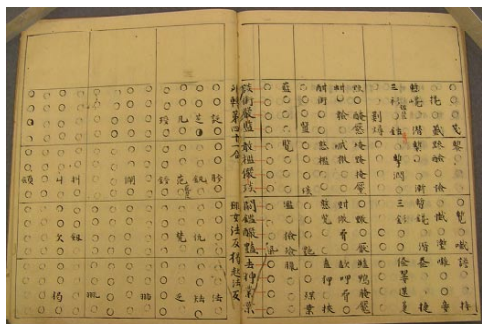
梵字に関しては，古来その形・音・義（意味）をあわせて理解することが求められた。第 3 巻は音，第 4 巻は義について著述するものである。

上写真中央は第 3 巻であり，「明梵字音」の字が見え，これは「1 明本朝仮音」および「2 明反音作法」に分かれるとされている。明覚によれば，字音を明らかにするためには，日本の仮名（1）と反音作法（2）を明らかにせねばならない。仮名が必要なのは，梵字には中天・南天の相違があり，漢字には漢音・呉音の相違があるため，

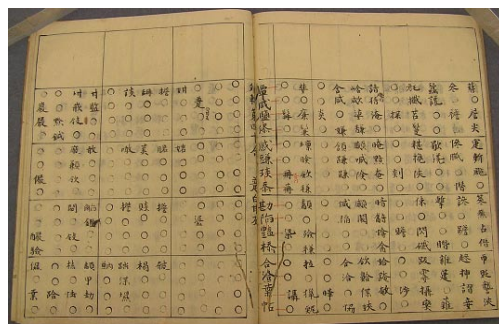
字を見ただけでは音は判明しないためだとされ，仮名つまり五十字をもって表せばいかなる音でも明らかにすることができる，と主張されている。このように，悉曇の研究から出発しつつ国語の問題に及ぶという姿勢は明覚の特徴として取り上げられ，この『梵字形音義』がその傾向をはじめて示す著作とされる。

明覚には，他に『反音作法』という著作があり，これは，漢字音を知るために，かなを用いた「反音」（反切により音を求めること）をおこなう方法を説いた著述である。

30) チ 530-658 『韻鏡』 貴重書 (応永元 [1394]) [雑詮第七]



2



1



【解説】『韻鏡』は中国の唐末五代（10世紀ごろ）の作と言われる。漢字の子音を縦23行、母韻を横16段とし、43枚の図表より成る韻図であり、中国では南宋以降、その伝承が絶えたのに対して、日本では鎌倉時代の明了房信範以来、主として学僧の間で広く用いられ、漢字音を論ずる根拠とされた。本写本は1394年の筆写になり、首尾の整ったものとしては現存諸本中最古とされる。

近年の国語学では、『韻鏡』の内実と悉曇学とは関係がない、とする見解が主流のようである。もっとも慈雲は『悉曇字記聞書』（書目5参照）その他の著述において、反切（漢字音を示すのに、他の漢字二字をもって示し、上字の頭子音と、下字の韻とを合わせて一音とする）などの方法を用いて梵字音の説明を行う際、かなり頻繁に『韻鏡』を引用している。そのため、参考文献を収める部立てである「雑詮」に収められていても不合理ではない。

いま一例を取り上げてみよう。「悉曇」に関して、（慈雲曰）「下の曇字。韻鏡第四十転。舌音平声濁行談字の字にて。華音はダムなり。今タンと清音に読むは日本の漢音なり。呉音は濁るなり」（『悉曇字記聞書』）。上の写

真1の左頁、および写真2の右頁が「第四十転」である。『韻鏡』は縦軸に声母を、横軸に韻を配してあり、声母（子音）としては、36字母を唇・舌・牙・齒・喉・半舌・半齒の7音に分類し、各区分はさらに全清・次清・全濁・清濁に細分されている。韻（母音）は206韻を、まず平・上・去・入の四声に分け、各声は四つの「等」に細分されて各韻が該当の等に配置してある。「談」の字は写真1の左頁2欄目、最上段右から3字目に見えているが、これは慈雲の記すとおり、「舌音・全濁／平声・談等」に位置する（「談」は平声（下）、広韻第二十三；『新字源』付録解説「漢字音について」を参照）。

なお筑波大学附属図書館には、馬淵和夫名誉教授の寄贈になる「馬淵文庫」があり、これは『韻鏡』関係の写本を集中的に収めるものである。書目40の解説末部を参照。馬淵博士による韻学研究は、東京教育大学・筑波大学に特色ある学統を築き、林史典、湯沢質幸（両名とも筑波大学名誉教授）ほか、韻学・漢字音研究の分野に多くの研究者を生んでいる。

31) チ 530-432 『磨光韻鏡』 2巻2冊 文雄 [雑詮第七] (板本)



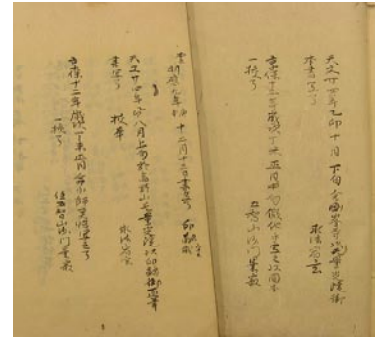
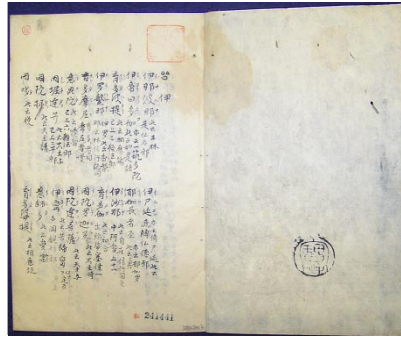
【解説】文雄（1700-1763）は京都浄土宗了蓮寺の僧。丹波国に生まれ、若くして江戸に遊学し、宗学のかたわら太宰春台（1680-1747）のもとで和漢の典籍を博搜するとともに、華音を学んだ。春台は荻生徂徠（1666-1728）を継ぎ、古文辞学にあつては音読を重んじたといわれる。『磨光韻鏡』は、延享元年（1744年）に刊行されたもので、わが国における『韻鏡』の受容を示す重要資料である。

文雄の時代には、まだ『韻鏡』の組織や性格自体が十分明らかにされておらず、漢字音研究が非常に観念的で

難解なものと化していた。これに対して文雄は、中国・日本の文献を渉獵して新来の中国音を綿密に検討し、『韻鏡』とは「文字の音韻を正すための鏡である」と唱え、その韻図としての性格を明らかにした（林史典解説『磨光韻鏡』、勉誠社文庫90、1981年参照）。

『慈雲尊者全集』に見る「梵学津梁」の従来の総目録には、上記の『韻鏡』と併せて『磨光韻鏡』も挙げられていることが多い。

32) ハ 300-212 『多羅葉鈔』 3巻3冊 心覚〔別詮第四之六〕



【解説】心覚（1117-80）は参議平実親の子で、はじめ天台宗・三井園城寺に入り、常喜院で学問に励んだ。あるとき興福寺の珍海と議論した際、しばしば論破され、このため顕教を棄てて密教に入ることにしたという。醍醐寺で小野流を授かり、のちに高野山に上って1156年両部灌頂を、1162年に重ねて秘法を受け、一院を結んで改めて常喜院と名づけたため、常喜院心覚と呼ばれる。このような経歴から台密・東密双方に通じた。東密の事相（儀礼遂行の実際）に関して小野流と廣澤流の二派が挙げられ、小野流は随心院（山科）、醍醐寺や勧修寺に、廣澤流は遍照寺、大覚寺や仁和寺に伝わるが、心覚は野澤二流を兼得したという。

『多羅葉鈔』は『梵語千字文』（義浄）や『唐梵文字』

『梵語雑名』などに載る梵語とその漢字音写・漢訳語を収集し、イロハ順に配列した字典であり、現存しかつ作者の判明する本邦最古の梵語辞書として重要である。第2巻と第3巻の末尾には写真右のように注記があり、本書目の筆写者が36に挙がる曇寂であることがわかる（左が中巻、右が下巻）。末尾の付記より、原本を印融（1435-1519）が1500年に写し、それを宥玄が1555年に写し、さらに曇寂が1727年に写していることが判明する。『多羅葉鈔』の写本の流布は稀であったとされるため、本学所蔵本は曇寂の筆写本でもあり、その価値は高い。印融は高野山無量光院の学匠、たえず学ぶため、外出時には牛に乗り読書に励んだという名僧である。

33) チ 425-24 『悉曇字記創学鈔』 12巻11冊 杲宝・賢宝〔雑詮第七之一〕



【解説】杲宝（ゴウホ；1306-62）・賢宝（ケンポウ；1333-98）はそれぞれ東寺観智院第一世、第二世として知られる師資である。杲宝は1359年以来、京都東寺の勧学会で唐・智廣の『悉曇字記』を講じ、賢宝がこれを筆録した。だが杲宝がその講了前に示寂したため、賢宝が未講部分

を補筆し、1380年に『悉曇字記創学鈔』全12巻が完成した。巻1から巻7上までが杲宝の口説、巻7下から巻12までが賢宝の補筆である。

東寺観智院は、水準の高い学統と、仏教・密教関係の書籍（「聖教」）を豊かに所蔵していることで知られる。

34) チ 425-17 『悉曇考覈（ゴウカ）抄』 4巻4冊 宥快〔雑詮第七〕（板本）



【解説】宥快（1345-1416）は室町時代、高野山の学僧。千葉県銚子の生まれと推定される。常陸国佐久山（現在の城里町）浄瑠璃光寺で修行を積み、のちに高野山に上った。同時代、高野山無量寿院門主であった長覚（1340-1416）に対し宝性院門主として、ともに一時代を築いた。空海の『御请来目録』への注釈書など、非常に多くの著

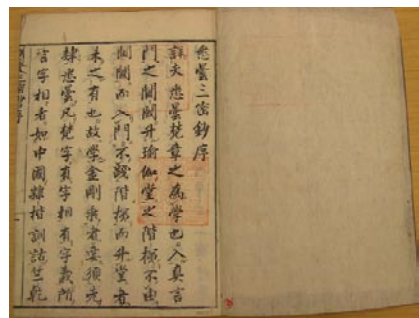
述がある。

『悉曇考覈抄』は、写真に見るように、宥快が記し亮遍が集めたものである。悉曇に関する疑義を問答体により解決することを目指した著述であり、悉曇連声など計37条が4巻に分けて記されている。本学所蔵本は1669年に開版刊行された際のもので貴重である。

35) チ 425-3 『悉曇三密鈔』 3 巻 7 冊 浄厳 [雑詮第七之二] (板本)

【解説】 浄厳（1639-1702）は江戸中期、慈雲にやや先立つ頃に密教・悉曇学の巨匠として活躍した。河内国に生まれ、高野山・南都で顕密二教を修め、安祥寺流の正嫡となり、新安祥寺流を打ち立てる。将軍徳川綱吉（1646-1709）の帰依を受けて江戸湯島に霊雲寺を開創し、大衆布教の一つとして結縁灌頂の儀式を盛んにおこなった。高貴寺 DVD では 0361 から 0367 に収められている。

『悉曇三密鈔』は、梵字本源・悉曇題目・正字形音・合字転声・重字混声・聯声合呼・音韻相通・字相字義の 8 門より成る。梵字の形・音・義にわたって、それまでの悉曇学の成果を集大成したものであり、浄厳自身の独自の見解と言えるものは少ない。ただその音韻相通の説は、門弟契沖（1640-1701）らによる国語学の基礎となっているとされる。契沖は『万葉代匠記』などで知られる国学者であり、中世的な秘伝の世界を離れ、文献学的方法を駆使する伝統を打ち立て、その学風は賀茂真淵（1697-1769）や本居宣長（1730-1801）らによって継承された。浄厳はまた、すでに鎌倉時代に日本に伝わっていたものの、それまで顧みられることのなかった『天竺字源』（書目 17）を参照しているのが特徴である。

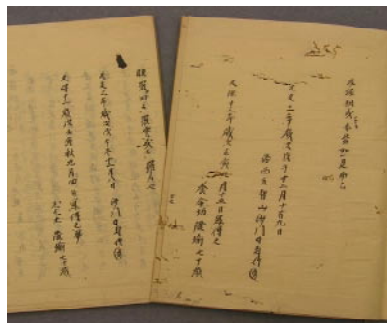
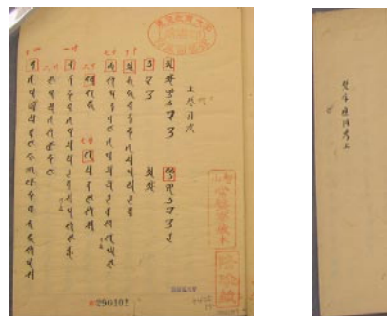


36) チ 425-55 『梵字通同考』 2 巻 2 冊 曇寂 [別詮第四]

【解説】 曇寂（1674-1742）は備後福山に生まれ、京都鳴滝の五智山蓮華峯寺に晋住した。悉曇学に関しては東寺観智院にて賢賀に師事、『悉曇字記』を学んでいる。次出の寂厳は弟子に当たり、慈雲に至る梵学の系譜を知る上で、この二人は重要な人物である。高貴寺 DVD には挙がっていない。

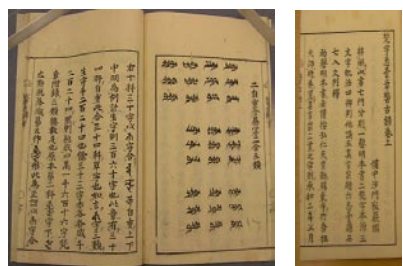
曇寂の梵字は正確であったと思われる、右写真（下）は dharmaśanti と読める。śanti（「寂」）は、五十字門による śa 字の字義でもあり、曇寂が自身の梵字表記に用いたことがうなずける。なお本学所蔵本のうちには曇寂の自筆本が存在し、書目 32 の心覚『多羅葉鈔』写本がそれである。

本書目の写本に関しては、巻末の付記から知られるように、筆記者は隆瑜（1773-1850）である。隆瑜は真言宗智山派総本山智積院第 33 世能化であり、聖教を収めるため、1847 年、財を投じて書庫「常盤蔵」を建てたことで知られる。本学所蔵本には、その間の経緯をうかがわせる印がある（右写真上）。



37) チ 425-33 『梵字悉曇章稽古録』 2 巻 2 冊 寂厳 [雑詮第七之十三] (板本)

【解説】 寂厳（1702-1771）は備中国宝島寺に晋住した僧で、1736 年に曇寂の許で悉曇を修める。元来南天相承に発する『悉曇字記』、およびそこに含まれる「悉曇十八章」に基づいた悉曇学習を廃することを提唱し、東密の正嫡として、空海が請来した『大悉曇章』系統の相承を復興させようと孤軍奮闘した。しかしながら悉曇界の大勢を変革するには至らず、この試みは「一過性」のものに終わっている（児玉義隆『梵字でみる密教』35 頁、大法輪閣 2002 年）。慈雲も「寂厳師などが字記を破すると云ふは愚の至りなり」（『悉曇字記聞書』）と述べて、悉曇入門に際し「悉曇十八章」の学習を奨励している。右写真にはきわめて複雑な梵字例が挙がっているが、これらは「悉曇十八章」に見られることはなく、『大悉曇章』に沿った梵字の例である。



＜参考展示＞

38) 188.5-J55『慈雲尊者全集』 (1926年) 首巻～第十七大尾、 思文閣出版 1974-77年。(再版)



【解説】慈雲尊者(1718-1804)の著作集であり、大正 15(1926)年に刊行された。編者は参考展示・次の書目 39 に挙げる長谷宝秀(1869-1948)である。「梵学津梁」に収められるべき作品を除き、当時収集しえた慈雲の全著述に関して、口述筆記されたものはもちろん、完成稿と草稿の双方が遺されたものは草稿についても(『南海寄帰内法伝解纜鈔』など)収録した、一大事業である。全 17 巻とされるが、第 1 巻の前に「首巻」が置かれ、慈雲伝の資料集等が収録されて有用であり、また第 9 巻は上下に分かれるため、結局総冊数は 19 冊となる。さらに、150 回遠忌を記念して 1955 年に「補遺」が刊行され、「毘尼篇」「真言篇」「勸導篇」「文藻篇」の分類の下に、収録漏れのあった著述が収められ、座談会なども収録されて有益である。

第 1 巻から第 3 巻までは『方服図儀』を中心とする袈裟関係の著述、第 4・5 巻は『南海寄帰内法伝解纜鈔』関係、第 6 巻は戒律学、第 7 巻は『金剛般若経』関係、第 8 巻は密教学、上下を成す第 9 巻は悉曇学関係、第 10 巻は雲伝神道、第 11 巻から第 13 巻までは主著『十善法語』および『人となる道』、第 14 巻から第 16 巻まではその他の小編、第 17 巻は系図や寺院の過去帳などを収める。慈雲のスケールの大きさを十二分に示す全集である。

本展示で公開される「高貴寺 DVD」は、長谷宝秀師によるこの『慈雲尊者全集』からの経緯がある。高貴寺寺務第 9 世の伎人(くれど)戒心和上(1839-1920; 書目 7 をも参照)は晩年、『弘法大師全集』などによりすでに令名の高い宝秀師のもとに甥の伎人慈城和上(1885-1942; 高貴寺寺務第 10 世)を遣わし、まずは慈雲の『方服図儀』の出版を慫慂した。その後戒心師は示寂するが、慈城師が引き続き宝秀師の許を訪ね、戒心師の本懐が『慈雲尊者全集』の出版にあったことを明らかにして、宝秀師にその編纂を慫慂したという。もっとも宝秀師が『全集』を編纂した際には、あまりの大部さのため

に「梵学津梁」を含めることは断念せざるを得なかった。このため「梵学津梁」は「幻の大著一千巻」と言われて久しかったが、このたび 200 回遠忌を期にデジタル化が完了したものである。

本展示では、書目 7 の筆記者、また書目 1 の注記者を上記の伎人戒心師と推定している。本展示に出品された書目の大部分は、おそらくは京の阿弥陀寺が廃寺になった際の流出本であると考えられるが、明治初年まで阿弥陀寺に保管された書目を扱える人物としては、その条件が限られる。

戒心和上は神戸市の浄土真宗寺院の三男として誕生、1858 年大阪北野万善寺(書目 3 参照)の寂然和上に師事、1863 年喜連村如願寺に住持、梵明と海如(1803-1873; 高貴寺僧坊寺務第 7 世)に学ぶ。1866 年釈雲照(1827-1909; 御室派仁和寺管長)和上に従い陀羅尼を研究したのち、1874 年に高貴寺に晋住している。戒心師は、上述のように江戸時代最末期から明治初期の間、雲照師のもと、京に遊学する機会を得たと思われ、明治 7～8 年とされる阿弥陀寺の廃寺前に所蔵書籍を参観することができたはずである。慈雲の自筆本『法華陀羅尼略解』に関して言えば、慈雲最晩年の京での著述であるだけに、おそらくこの著作の存在を知るのは、後にここを訪れた戒心師のみだったかも知れない。戒心師が高貴寺に上った前後、阿弥陀寺は廃寺となる。長谷宝秀師は『全集』に所収される慈雲の諸作品に関して、その多くを和田智満(1835-1909)師が 1854 年より晋住した西賀茂神光院蔵の写本に負っている。宝秀師は神光院の蔵書には手が及んでも、すでに売却されたであろう阿弥陀寺蔵書のその後までは探索が及ばなかったものと考えられる。『法華陀羅尼略解』のわずかな書き入れに関しては、「見」の字(ツクリの場合も含む)の特徴的な筆致、筆勢などから、おそらく伎人和上の手になる可能性が高いものと本展示では推測している。

39) 118.5-H35『長谷宝秀全集』全六巻+別帙、 種智院大学密教資料研究所編、法蔵館 1997年。

【解説】参考展示の第 2 点として、上記の長谷宝秀和上の全集を出品する。宝秀師は、真言宗連合京都大学(現在の種智院大学)の教授を勤め、『弘法大師全集』『密教大辞典』そして『慈雲尊者全集』の編纂を手がけた。また自身の全集第 4・5 巻には、1938 年に初版の刊行された「(弘法)大師御請来梵字真言集」(上・下)が再版

され収められている。本文中にも言及したように、「梵学津梁」の冒頭「本詮」の最初には「弘法大師請来梵本」42 部 44 巻が収録されている。



40) ① 829.88-B64 梵字貴重資料刊行会編著
『梵字貴重資料集成』, 東京美術 1980 年。

【解説】「図版篇」および「解説篇」の全2巻より成る。本邦全国の寺院等に所蔵される梵字資料に関して、貝葉・写本・掛軸などにわたり包括的に収録したもの。閲覧の容易でないものもあり、学術的価値は計り知れない。図版2には、慈雲が自らの書風を編み出したとされる「高貴寺貝葉」も収録されている(本図録「悉曇学と仏教史」を参照)。写真は図版173「悉曇摩多体文」(京都神光院蔵)、慈雲による梵字「したんらそと」である。解説篇の執



筆者は宮坂有勝、馬淵和夫、築島裕、大山仁快、坂井栄信、小久保和夫である。

② 811.1-Ma12 馬淵和夫『日本韻学史の研究』
(増訂版) I・II・III, 臨川書店 1984 年。

【解説】馬淵和夫(筑波大学名誉教授; 1918-) は、本邦悉曇学の伝統を築き上げた国語学の巨匠である。1954 年より 1981 年まで、東京教育大学・筑波大学において教鞭を執る。悉曇学・漢字音研究による「韻学」ばかりでなく、『今昔物語集』をはじめとする古典文学への注釈や、国語教育学においても数々の業績をのこす。本書の第1巻「日本韻学史概論」は本邦悉曇学史に相当し、第2巻では韻学と国語学・国語史上の諸問題について考究が行われ、第3巻は「日本韻学書籍集録」(悉曇篇)である。本書は 1961 年に提出された馬淵博士の学位論文で

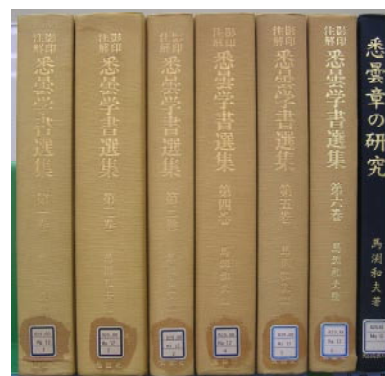
あり、審査に当たったのは佐伯梅友・吉田精一・河野六郎の各教授であったことが第3巻の跋語に記されている。『五十音図の話』(大修館書店、1993 年)は本書のエッセンスをまとめた一般向け書籍であり、こちらもロングセラーである。



③ 829.88-Ma12 あ) 馬淵和夫編『影印注解悉曇学書選集』全6巻, 勉誠社 1985-1992 年。
い) 馬淵和夫著『悉曇章の研究』, 勉誠出版 2006 年。

【解説】あ) 全6巻から成り、日本悉曇史の重要書目を写本影印版にて載録し、校異脚注と解題を付したものの。空海の『梵字悉曇字母并积義』に始まり、安然『悉曇藏』(第1巻)、明覚『梵字形音義』『悉曇要決』(第2巻)、杲宝・賢宝『悉曇字記創学鈔』(第5巻)など、本展示に出品される書目も含まれている。主に東寺観智院および高野山大学図書館所蔵の写本が用いられ、明覚の『悉曇要決』に関しては本学所蔵本が採用されている。第1巻序によれば「日本における学問の歴史において、悉曇学はもっとも学問らしい学問として、常に新たな考究が加えられてきた」とされる。編者はあくまでも言語学者としての立場に立ち、「梵字のみの文献、乃至真言・陀羅尼を所記した梵語の文献、あるいは字義的解釈を主にした文献」等は、「密教の信仰と結びついて」いるため、とり上げられていない。

い) 著者の永年にわたる悉曇学研究の中から、特に「悉曇章」の請求・伝承および関連諸事項、漢字音・国語に

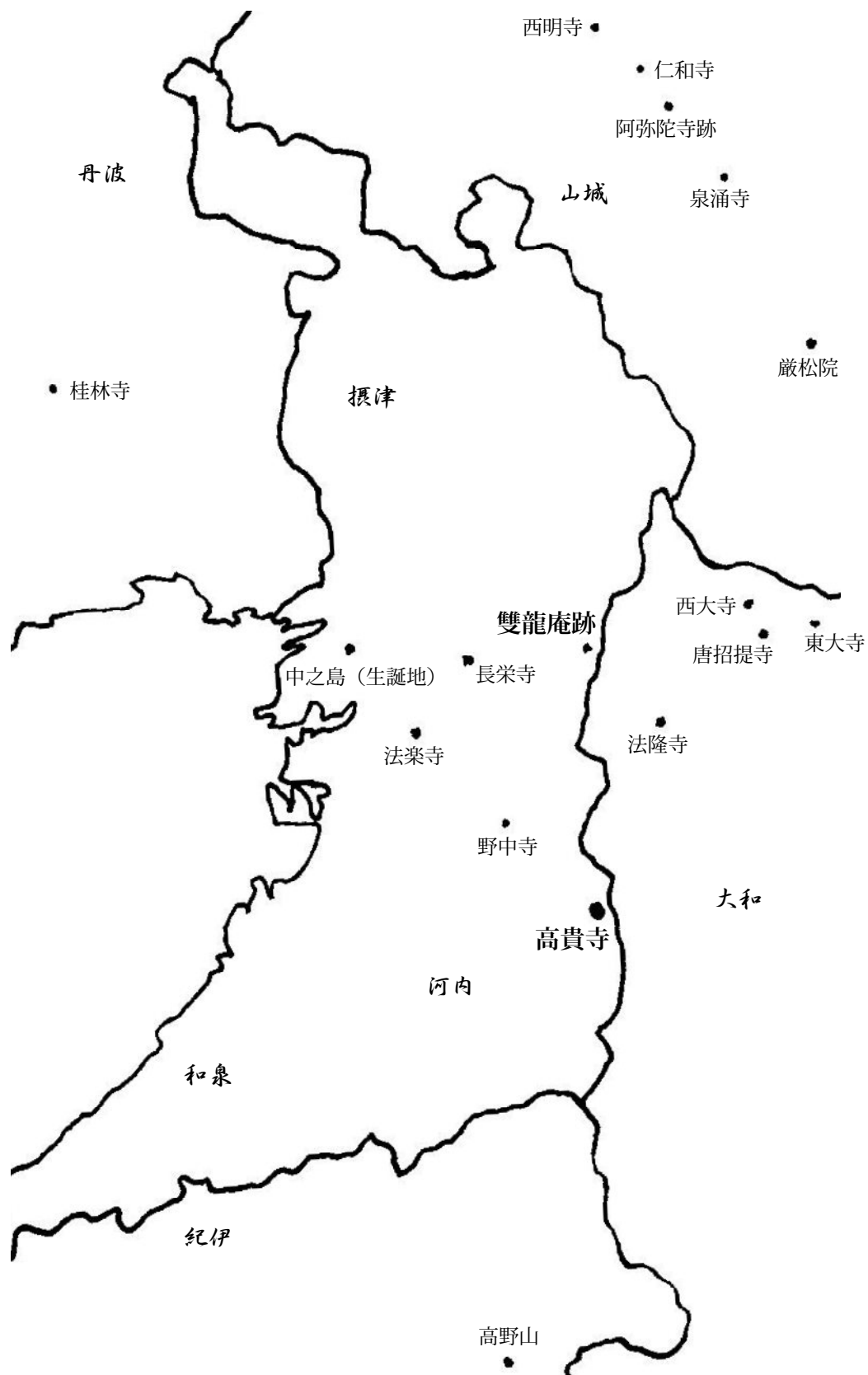


おける清濁音等の問題にしばって考究した論文集。本展示に出品した空海『中天悉曇章』(書目25)に関しても、本学所蔵本に基づきつつ 66-67 頁に言及がなされている。著者は、当写本の奥書は史実と符合するため、「悉曇章」に関して『悉曇字記』と全同であるなどの点は、『悉曇字記』成立の前段階の姿を示す証拠ではないか、との見解を採っている。

— 筑波大学附属図書館所蔵「馬淵文庫」について —

【解説】2003 年 3 月、山内芳文図書館長(2001 年 4 月-2003 年 3 月在任)のもと、林史典、稲垣泰一両教授(3 名とも筑波大学名誉教授)を通じて、馬淵和夫名誉教授の所蔵書計 132 件が本学に寄贈された。現在、本学附属中央図書館和装図書コーナーに保管されている。その大

部分は『韻鏡』に関係する古写本・板本類であり、うち 5 点が貴重書の指定を受けた。『韻鏡』は、日本語音韻史・漢字音研究・古典文献学などさまざまな面において、日本語日本文学に不可欠の書物であり、「馬淵文庫」の価値は無比のものであるといえる。



慈雲尊者ゆかりの土地

後記

本図録は、平成21年度～23年度科学研究費補助金基盤研究(C)「古典古代学を基盤とした「東方予型論」による包括的学問体系の構築」(課題番号21520312・研究代表者秋山学)による研究成果の一部であり、特記なき場合、執筆者は人文社会科学研究科准教授秋山学である。

本文中に触れることのできなかった参考文献として、次のものを挙げておく。

松本俊彰『慈雲流 悉曇梵字入門』(基礎篇)、高野山出版社 2003年。

同『慈雲流 悉曇梵字入門』(応用篇)、高野山出版社 2009年。

静 慈圓『梵字悉曇』、朱鷺書房 1997年。

同『はじめての「梵字の読み書き」入門』、セルバ出版 2010年。

児玉義隆『梵字必携』、朱鷺書房 1991年。

木南卓一『慈雲尊者 生涯とその言葉』、三密堂書店 1961年。

『慈雲尊者の書』2008年。

木南卓一(編)『長谷宝秀先生遺墨遺文集』1977年。

三浦康廣『慈雲尊者 人と芸術』、二玄社 1980年。

沈 仁慈『慈雲の正法思想』、山喜房佛書林 2003年。

慈雲尊者二百回遠忌の会(編)『真実の人 慈雲尊者』、大法輪閣 2004年。

なお本展示会の開催にあたり、高貴寺住職前田弘隆、同前田弘観、野中寺住職野口眞戒、法楽寺リーヴスギャラリー、小坂奇石記念館学芸員砂田円、種智院大学教授頼富本宏の各氏、および黒川古文化研究所には大変お世話になった。ここに厚く御礼申し上げる。

表紙梵字は大阪・高貴寺奥の院蔵「菩提道場」(ボウヂマンドラ)

裏表紙慈雲尊影・漢詩は大阪・法楽寺蔵「雙龍庵巖上坐禅像」部分

山中從來無曆日 寒盡花開萬國春 滿林清風静夜月 天長地久與誰人

背景は雙龍庵跡付近(長尾の滝)

企 画

筑波大学大学院人文社会科学研究科

川那部 保明（研究科長）

秋山 学（准教授）

筑波大学附属図書館

波多野 澄雄（館長）

逸村 裕（副館長・研究開発室長）

関川 雅彦（副館長）

附属図書館研究開発室

大塚 秀明（大学院人文社会科学研究科准教授）

附属図書館特別展ワーキンググループ

篠塚 富士男（主査）

嶋田 晋

蘭部 明子

永濱 恵理子

福島 裕子

真中 孝行

峯岸 由美

村尾 真由子

特別講演会「慈雲尊者と悉曇学」

平成 22 年 10 月 10 日 13:30 ～ 15:30

講師 秋山 学（大学院人文社会科学研究科准教授）

電子展示 Web ページ

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/>

平成 22 年度 筑波大学附属図書館特別展

慈雲尊者と悉曇学 ― 自筆本『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界 ―

平成 22 年 10 月 4 日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2010

〒 305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社

